Volume33 December 2007

■Research Review

An observation of Nijiiro Town in Amami-Oshima ;
A case-study of environmental education at Sekitoku Elementary School in Tatsugo and an environmental word association game designed by university students
Omae Yoshikazu(Faculty of LEH, Kagoshima Univ.)
Akahoshi Miho(Faculty of LEH, Kagoshima Univ.)
Yano Manami(Faculty of LEH, Kagoshima Univ.)

Trends in the Amami Kokuto Shochu Industry
Yamamoto Kazuya(Faculty of LEH, Kagoshima Univ.)

■Amami Report

An example of the dissemination of Amami folk culture -the life histry of Wada Kiyo from Inokawa on Tkunoshima(3)
Honda Hirotaka(Chairman,Tokunoshima Local Research Group)

Thoughts on how to deal with artifacts in Amami
Asanuma Enoki(Administrative Director of Healthcare Corporation Hekizankai)

■Amami Sketch

2008 Amami Access Centre Orientation

■Information

AMAMI News Letter

KAGOSGIMA UNIVERSITY
ISSN-1348-8872

ISSN-1348-8872

AMAMI News Letter

NO.33

〈2007 年度　冬季号〉

■　研究調査レビュー

奄美大島の『にじいろタウン』を訪ねて
奄美黒糖焼酎産業の動向

■　しまゆむた

奄美民俗文化の事例
奄美の古い宝物との付き合い方愚考

■　島嶼スケッチ

平成 20 年度奄美サテライト教室説明会

奄美ニューズレター　鹿児島大学　2007 年 12 月

奄美ニューズレターについて

■　奄美ニューズレターは、2003年度からはじまった鹿児島大学全学総合プロジェクト「島嶼圏開発のグランドデザイン ―― 南西諸島における環境ガバナンス型地域政策」の成果を発表する目的で発刊されました。

■　奄美群島および沖縄を含む広い南西諸島を沖縄ではなく、奄美群島から分析しようという新しい試みです。

■　研究は、文化・自然・人・経済・情報・農学・工学という鹿児島大学の研究者を中心とする研究グループによって行われております。奄美ニューズレターは、その研究を広く南西諸島の研究者に公開し、わが国の島嶼研究の向上を目指すものです。

■　奄美ニューズレターは、2005年11月に発刊された24号まで、月刊でしたが、2006年１月発刊の25号からは、発行責任を奄美委員会が担うことになり、１年間計４号を季刊で発刊することになりました。

■　奄美ニューズレターは、25 号から季刊の学術雑誌となり、下記の内容を掲載いたします。

・研究調査レビュー	鹿児島大学所属の研究者からの成果発表
・しまゆむた	奄美群島区の地元研究者からの現地レポート
・島嶼スケッチ	上記以外の寄稿文
・鹿大資料紹介	鹿児島大学所蔵奄美資料の紹介
・ちーびし	執筆者紹介、奄美関連の行事案内、編集後記

■　企画と編集を担当する奄美委員会のメンバーは、下記のとおりです。

奄美委員会

研究科長	木部　暢子		
奄美サテライト特任教授	井上　晃男		
奄美委員会委員長	山田　誠		
法政策学科選出委員	飯田　泰雄	永野　司	
経済情報学科選出委員	皆村　武一	山田　誠	山本　一哉
人文学科選出委員	桑原　季雄	西村　明	

○編集後記

■表紙の写真は、人文学科の桑原先生からご提供いただいた徳之島の闘牛大会の写真です。徳之島の闘牛大会は、年３回の全島一決定戦をはじめ、年 20 回程度開催されているそうです（伊仙町役場ホームページより）。闘牛の情報については、「徳之島メビウス CLUB」ホームページ、「島と人と牛と」ホームページをご覧ください。

■本号「島嶼スケッチ」でご紹介しましたように、11 月 17 日に奄美サテライト教室の説明会が奄美市と徳之島町で開催されました。講義システムや受講申請等につきましては、奄美サテライト教室ホームページをご覧ください。

■『奄美ニューズレター』は鹿児島大学の研究者による調査研究成果や奄美在住の皆さんからの現地レポート等を掲載する季刊誌です。奄美委員会では投稿原稿を募集しています。

（編集担当、山本）

研究責任者　木部暢子　　編集責任者　奄美委員会
奄美ニューズレター　　ＡＭＡＭＩ　Ｎｅｗｓ　Ｌｅｔｔｅｒ
発行　鹿児島大学　　発行日　2007年12月31日

目次

■研究調査レビュー

奄美大島の『にじいろタウン』を訪ねて
―龍郷町立赤徳小学校における環境教育実践事例と
大学生による環境連想ゲームの提供―
大前　慶和（鹿児島大学法文学部）
赤星　美穂（鹿児島大学法文学部）
矢野　真奈美（鹿児島大学法文学部）

奄美黒糖焼酎産業の動向
山本　一哉（鹿児島大学法文学部）

■しまゆむた

奄美民俗文化の事例
～徳之島井之川和田キヨ嫗の生活史（３）～
本田　碩孝（徳之島郷土研究会会長）

奄美の古い宝物との付き合い方愚考
朝沼　榎（医療法人碧山会理事長）

■島嶼スケッチ

平成２０年度奄美サテライト教室説明会

■ちーびし

■研究調査レビュー

奄美大島の『にじいろタウン』を訪ねて[1]
―龍郷町立赤徳小学校における環境教育実践事例と大学生による環境連想ゲームの提供―

大前　慶和・赤星　美穂・矢野　真奈美（鹿児島大学法文学部）

1. はじめに

経営戦略論研究室では、平成18年度に環境教育・食育教材『にじいろタウン』の開発を行った。『にじいろタウン』は子供達が主役の教材である。ダンボールコンポスターなる簡易的な生ゴミ処理装置を子供達自身で作成し、生ゴミを堆肥としてリサイクルしていく。子供達が自作した堆肥は野菜等の栽培に利用し、再び食卓に食材として循環することを体験するのだ。また、体験によって引き出された知識欲を満足させるために、環境問題や食問題の知識についても蓄積できるように工夫されている。

このような特徴を持つ『にじいろタウン』であるが、平成19年度には鹿児島県奄美大島の龍郷町立赤徳小学校の6年生のクラスが家庭科の教材として採用いただいた。当研究室は、赤徳小学校におけるダンボールコンポスターの状況および実践されている教育内容を調査する機会に恵まれ、平成19年7月に調査を実施した。本稿では、当該調査内容をまとめることとする。

また、小学校訪問時に研究室所属学生による環境授業の提供という試みを実施しており、これについても報告を行う。

2. 持続可能な開発のための教育[2]

我が国は、かつて高度な経済成長を享受した負の側面として公害問題に直面し、それを克服してきた経験を有している。この過程においては、公害教育の展開が教育の現場主導でなされたといわれている。この後、公害国会が1970年に開催され、我が国の環境教育の基礎がここに形成されるに至った。

ここで、我が国における公害教育と環境教育には必ずしも連続性がない点に注意しておく必要がある。公害教育は、あくまで公害から子供達の身を守るためになされた教育であって、健康増進や時には企業批判をその内容としていた。これに対して環境教育は、環境保全の意義や方法を学ぶことが目的であり、最終的には環境保全に資する行動の実践を目指しているものである。我が国における環境教育の原点は公害問題に求めることができるとしても、環境教育が実際的に展開されるようになったのは、遅れて1980年代以降とみるのが適切である。

さて、1980年代半ば以降、地球環境の悪化は世界的な関心事となっていた。局所的な公害問題とは異なり、環境問題は地球規模で展開されている複雑な問題であるとの認識がなされ、1992年には“環境と開発に

1　環境教育・食育教材『にじいろタウン』は、科学研究費補助金を活用した研究成果として無償公開しているものである。龍郷町立赤徳小学校での視察および環境授業の提供には、鹿児島大学法文学部の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）の資金を活用している。

2　大前慶和（2005）

関する国連会議”（地球サミット）が開催された。地球サミットでは、「持続可能な開発」の概念が打ち出され、“現代の資源消費によって将来の世代における開発が制約されるべきではない”ことが広く認識されるようになった。

この持続可能な開発の概念は、自然を守ることこそが重要であるとの偏重が見られたこれまでの環境教育を、より豊かなものへ発展させたとみることができる。持続可能な開発を実現するためには、自然破壊を食い止めることのみならず、南北問題、人口問題、食糧問題、平和問題等、様々な社会問題との関連性に関心を注ぐ必要性があるためである。つまり、環境教育により広い視野が求められるようになったと理解される。

この流れを確固たるものとしたのは、1997年に開催された“地球と社会に関する国際会議：持続可能性のための教育とパブリック・アウェアネス”（テサロニキ会議）である。テサロニキ会議では、環境教育を「持続可能性のための教育」と表現してもかまわないとの合意が得られている。また、持続可能性のための教育には、社会科学や人文科学を含めた全体的で学際的なアプローチが必要とされている、とも主張されている。この理解こそが、現代に必要とされる環境教育の内容であり、「持続可能な開発のための教育（ESD；Education for Sustainable Development）」と称されるようになってきている。

なお、2005年より「国連持続可能な開発のための教育の10年」が展開されている。これは2002年の“持続可能な開発に関する世界首脳会議”（ヨハネスブルク・サミット）において日本が提案し、決議されたものである。提案国の責務として、ESDを広く実践していく使命を、我々は認識すべきであろう。

3. 環境教育教材『にじいろタウン』[3]

ESDという意味での環境教育を展開するために、当研究室では環境教育教材の開発を進め、既に一定レベルの成果を創出した。『にじいろタウン』と名付けられた本教材は主に小学校児童を対象としており、複数のメディアを活用している点に特徴がある。中心的な役割を果たすのがweb教材である『おいでよ！ここはにじいろタウン7番地～あそび感覚で環境と食を学ぶまち～』[4]で、これを補助するものとして印刷媒体の『にじいろタウン・KidsPassport』[5]および『にじいろタウン・取扱説明書』[6]を用意している。

web教材『にじいろタウン7番地』は仮想のまちで、主人公として「まもる君」と「みどりちゃん」という小学生が登場する。また、環境問題に詳しい「しろくま先生」が謎の存在として登場し、まもる君やみどりちゃん達と様々な体験をする設定となっている。周知のように、人間活動がさほど活発にはなされていない北極圏でも環境問題は深刻化しており、オゾンホールの存在、地球温暖化、汚染物質の蓄積などが影響し、シロクマ（ホッキョクグマ）は絶滅の危機に瀕している。にじいろタウンのしろくま先生は、実はこうした環境問題の象徴として教材の中に登場しているのである。

3　大前慶和（2006）、大前慶和（2007）

4　http://imozo.leh.kagoshima-u.ac.jp/~ecokids/
なお、本webページの利用は無償である。

5　印刷冊子体として用意しており、残部僅少ながら希望者には無償配布を実施している。なお、PDFファイルの配布は行っていない。

6　http://imozo.leh.kagoshima-u.ac.jp/~ecokids/ にてPDFファイルを無償配布している。

さて、にじいろタウン内での体験の内容は大きくは2つあり、第1はダンボールコンポスターの作成および生ゴミ処理、第2はダンボールコンポスターで作った堆肥を活用した野菜栽培、である。

ダンボールコンポスターとは、ダンボール箱、おがくず（のこくず）、腐葉土などを原材料として作ることのできるシンプルな生ゴミ処理装置のことである。例えば腐葉土など、購入する必要のある素材は幾分あるものの、多くは子供達自身で集めることのできる素材ないし廃棄物である。ダンボール箱におがくず（のこくず）と腐葉土を混入後、水分調整をすれば微生物が活性化し、生ゴミを分解していく仕組みである。この簡単な装置でも、日量500グラムの生ゴミを約2ヶ月間にわたって処理できる能力を有している。生ゴミ投入終了後は、さらに約2ヶ月間を目安に熟成をさせれば、ダンボール箱に充填された基材は堆肥として活用できる状態になる。

こうして子供達自らの手で作った堆肥を土壌と混合すれば、プランター等で簡単な野菜栽培が体験可能となる。肥料分を含有しない赤玉土に対しては、20～30％程度の堆肥混合率で好成績を収めている。小松菜等の葉物野菜を選択すれば失敗が少なく好適だが、工夫をすればニンジンやトマト、ピーマンなどの栽培も楽しいものである。イチゴの栽培も筆者らで実験をしたが、特に大きな問題は発生せず、子供達の興味を引き出すには良い素材である。

生ゴミ処理および野菜栽培という2つの体験を通じて、小学校児童には環境問題を学ぶきっかけが与えられる。例えば、ダンボールは再生紙の代表であること、生ゴミの多くは焼却処理されていること、焼却処理はダイオキシンの問題や地球温暖化と深く関連していることなどへの気づきが誘発され、こうした諸点については『にじいろタウン』内で解説を行っている。また、生ゴミを始点として、我が国の食料自給率の低さ、廃棄食品の多さ、地球規模で発生している飢餓問題などについても学ぶことができ、食育も同時に展開できるように工夫してある。食問題との関係性にまで視野を広げつつ環境問題を考えさせようとするのが狙いであり、この点においてまさに『にじいろタウン』はESDを実践するための教材と言えるのである。

ただし、web教材『にじいろタウン7番地』では、こうした関心の広がりを誘発するために、あえて明確には解答を示さないようにしている部分がある。また、環境連想ゲーム（環境問題がどのように連鎖していくのかについて、ストーリーを作り上げるゲーム）や食べものマップ（食品が日本あるいは世界のどこで作られているのかを白地図に記入していく）を提案してもいる。小学校児童に対して行動することを促し、自分達で実際に調査を実施したり、作業を通じて何らかの気づきを得て欲しいと考えたからである。

そこで用意したのが『KidsPassport』なる冊子体だ。これは子ども専用の漫画を多用したテキストで、にじいろタウンに旅をするための子ども専用パスポートという位置づけにしている。『KidsPassport』には様々なヒントが掲載されている他、実験の記録用紙や塗り絵として活用できる工夫を盛り込み、小学校児童の興味を継続的に引き出せるような配慮をした。環境連想ゲームと食べものマップのワークシートも用意してある。

一方『取扱説明書』は大人向けの印刷物で、小学校あるいは自宅で子供達を指導する際のポイントをまとめてある。子供達には開示しない方がよいと思われる情報（例えば、ダンボールコンポスターに充填する基材の原材料は、おがくずの代替として園

芸資材店で容易に入手可能なピートモスが活用できるなど）も掲載しており、子供のサポート役としての大人への配慮を行った。

以上のような内容を持つ環境教育教材『にじいろタウン』は、大きくは2つの開発視点を意識して開発されていることを、ここでは強調しておきたい。

第1は、子供達に実際に体験をさせ、気づきの機会を多く与え、自身で解決を求めさせるようにしている点である。環境教育を実施する際に、知識を提供するスタイルをとることが少なくない。このような教育スタイルにも意義はあるが、我々の狙いはまず体験をさせ、そこから興味や疑問を抱かせ、その後に知識欲を引き出そうとする点にある。子供達に解答を意図的に示さない手法の採用を先に指摘したが、これもまた体験から知識欲を引き出そうとの狙いがあったためである。また、ダンボールコンポスターを入手容易な素材から作ることにこだわったのも、子供達自身が主体となってダンボールコンポスターを作り上げて欲しいとの願いを込めてのことである。

第2は、環境教育と食育をシームレスに提供することである。生ゴミを接点として、子供達は環境問題と食問題を同時に考え、また行動する機会が提供されている。すなわちこれは、ESDの視点を強調しているのである。環境問題だけを解決すればよいのではなく、関連する問題との調和を図ることこそが、持続可能な開発には必要である。食問題の他にも考慮すべき諸問題が数多くあることは認めるにしても、環境教育と食育を同時に進めることのできる意義は大きなものだと思われる。

4. 龍郷町立赤徳小学校での実践

持続可能な開発のための体験型環境教育教材『にじいろタウン』は、平成19年度、奄美大島の龍郷町立赤徳小学校6年生の授業に採用いただいた[7]。家庭科の学習内容に廃棄物のリサイクル・循環が取り上げられており、『にじいろタウン』が活用可能であるとの判断があったということである。実際に小学校で『にじいろタウン』を活用いただけることは、筆者らにとっては貴重なデータの収集が可能となることを意味していた。

赤徳小学校では、『取扱説明書』における我々の提案にしたがい、1学期はダンボールコンポスターによる生ゴミの処理を、2学期は熟成させた堆肥を活用した野菜栽培を、そして3学期にはまとめ学習を実施するという計画が立てられた。こうした中で、筆者らは2007年7月9日に赤徳小学校を訪問する機会を得、現地でダンボールコンポスターの稼働状況を調査した他、小学校児童の率直な感想に触れることができた。ここではまず、小学校におけるダンボールコンポスターの稼働に関して、調査の結果明らかとなった問題点を簡単に検討しておきたい。

赤徳小学校におけるダンボールコンポスターの実践において最大の問題となっていたのは、給食残飯が発生していないという事実であった。赤徳小学校の児童は給食を残さず食べており、したがって生ゴミは、クラス担任である赤星教諭が自宅から持参する方法によって確保されていたのである。生ゴミの内容物については、野菜の調理くずがほとんどであった。これは、児童達の生ゴミに対する拒絶反応を回避しようとする教諭の配慮である。教諭の持参した生ゴミを、児童達が当番制でダンボールコ

7　教材を採用頂き、また毎日のダンボールコンポスターの管理等を児童に指導下さった赤星恵子教諭に、ここで謝意を表したい。

写真１　赤徳小学校のダンボールコンポスター

ンポスターに投入・攪拌するシステムにより、およそ2ヶ月間にわたって生ゴミの投入が行われていた（写真1）。

赤徳小学校における残飯不足という最大の問題は、しかしながら、他の多くの小学校では生じないであろうと思われる。むしろ、給食残飯が多く発生していることの方が多いからである。したがって、赤徳小学校における残飯不足は、特殊ケースとして取り扱うのが適切である。

ただし、生ゴミに対する児童の先入観や拒絶反応を回避するために、教諭が野菜くずを中心に持参されていた工夫については、大いに参考とすべきである。給食残飯をダンボールコンポスターに投入することは、資源循環の視点からは合理性があるが、子供達にどのような印象あるいは意味解釈を与えるのかについては議論の余地がある。「生ゴミは汚い・不潔だ」という先入観は克服すべきともいえるが、「残飯を発生させてもダンボールコンポスターで処理すればよい」との安易な理解が子供達に浸透してしまうことは好ましくない。むしろ、残飯を出さない方向性に教育すべきであろう。この点を重視し、ダンボールコンポスターに投入する生ゴミを小学校児童の自宅から持参させるという方法[8]も、一考の価値がある選択肢であるといえる。

この他に比較的軽微な問題点として認められたことには、第1にダンボール箱の崩壊を指摘できる。赤徳小学校のダンボールコンポスターには2重構造のダンボール箱は用いられておらず、単層構造のダンボール箱2個を重ねて利用する工夫がなされていた。使用されていたダンボール箱はミカン箱よりもかなり大きなものでもあった。そのためか、ダンボール箱の強度が不十分で、スコップにて攪拌する際にダンボール箱を傷つけてしまい、側面に大きな穴ができている状態になっていた。小学校児童が管理するダンボールコンポスターであるから、こうしたアクシデントは当然に予測していたことであり、「このような状態になった場合には新しいダンボール箱に基材を移し替えれば問題はない」とのアドバイスを行った。

第2点は、基材中に虫が発生していたことである。ダンボールコンポスターを運用する際には、Ｔシャツの襟および袖口をミシンで縫い合わせたコンポストキャップ[9]をダンボールコンポスターに被せることによって防虫を図るが、コンポストキャップの作りが不十分であった[10]ため、虫の混入を許してしまったようである。発生した虫の詳細は不明であったが、幸いにも児童に強い嫌悪感を与えるものではなかったようで、大きな問題とはなっていなかった。しかしながら一般には、虫の発生によってダ

8　特定非営利活動法人循環生活研究所（福岡市）はダンボールコンポスターを活用した環境教育を小学校にて先駆的に実践しているが、学校給食の残飯は利用せず、小学校児童に自宅から野菜くず等を持参させるようにしている。

9　特定非営利活動法人循環生活研究所の考案した素晴らしい工夫である。

10　Ｔシャツが加工されずに、そのままコンポストキャップとして利用されていた状態であった。

ンボールコンポスターの運用をあきらめるケースが多くあるため、防虫の徹底は極めて重要な要素である。

総合的に評価すれば赤徳小学校ではうまくダンボールコンポスターが運用されており、教材として利用が不可能になるような決定的な問題はなかった。この事例のみで判断することは早計に過ぎるとはいえ、小学校における環境教育にダンボールコンポスターが活用可能であること、すなわち『にじいろタウン』の利用可能性が確認できた。

一方で、小学校児童達のダンボールコンポスターに対する感想については、おおむね良好であるとの印象を受けた。赤星教諭の報告によれば、ダンボールコンポスターに対する児童の興味はかなり強かったようで、毎日の基材温度の変化を楽しみにしていたということであった。また、コミュニケーションをとった児童からはダンボールコンポスターに対する質問や経過説明などがあり、やはり関心を持って生ゴミ処理に取り組んでいたことがうかがわれた。ただし、2ヶ月間の長期にわたって生ゴミ処理に関心を持ち続けた児童は少なかったとのことで、この点については筆者らの仮説通りであった。

小学校児童の関心を持続させる工夫が必要であるとの認識は、web教材および『KidsPassport』の制作理由の1つであった。単に生ゴミを分解させるのではなく、関連する知識蓄積へのきっかけを与えたり、調査をうながしたりしたわけである。とりわけ『KidsPassport』は好評であり、一気に最後まで読み終えた児童がいたり、塗り絵として活用した児童もいたようである。『にじいろタウン』に登場するオリジナルキャラクターについても児童に受け入れられており、これらはいずれも制作意図通りの結果であった。

5. 赤徳小学校における環境授業の提供

5-1. 環境連想ゲームのワークシート

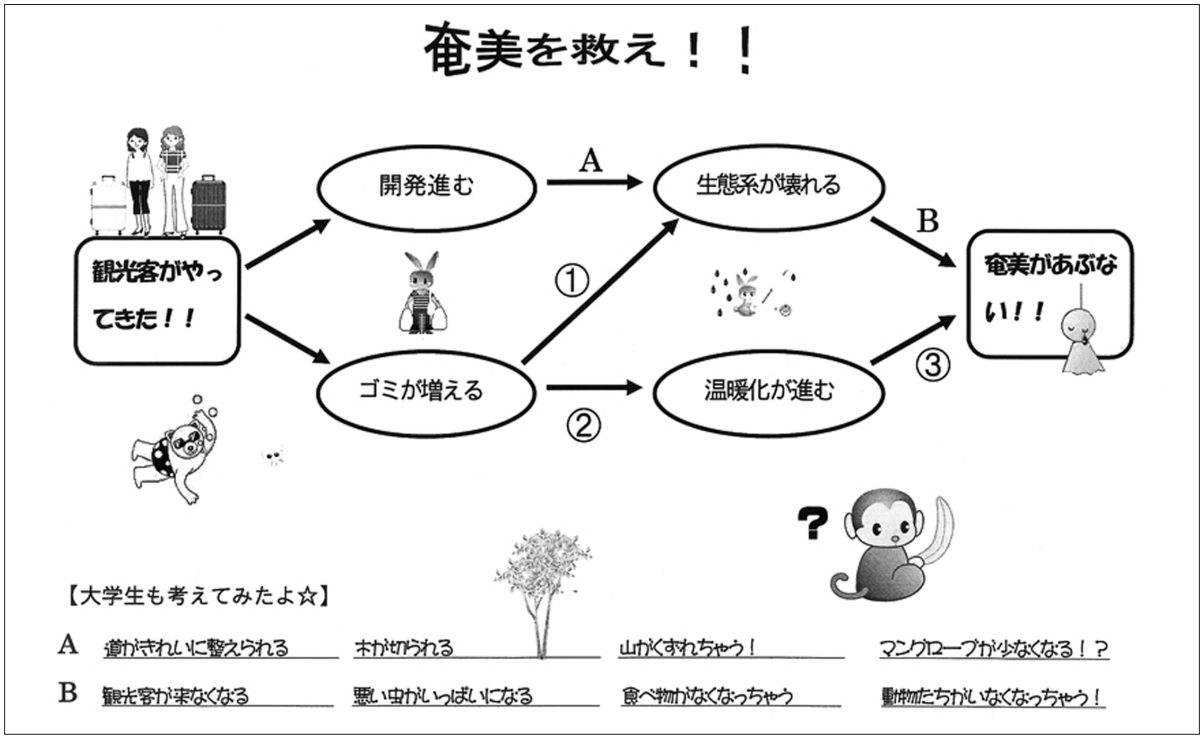
今回の小学校訪問では、ダンボールコンポスターの運用状況を調査するのみならず、同行した研究室所属大学生による環境授業の提供が、教諭より許されていた。そこで、『KidsPassport』内で提案した環境連想ゲームを活用した授業を研究室所属大学生主体で企画し、実施した。ここに連想ゲームとは、文字通りある1つのキーワードから連想される事象を挙げ、次々と事象間の因果関係に注目して連想を広げていくゲームである。事象を丸で囲み、矢印によって事象の関係性を示すというシンプルなゲーム内容となっている。

赤徳小学校での環境授業では、図表1のような環境連想ゲームのワークシートを用意した。このワークシートは、『KidsPassport』内で提案している環境連想ゲームの形式を大幅に変更したものである。

通常であれば、始点となるキーワードを与えた後、ゲームの参加者には自由に連想をしてもらう形式をとる。しかしながら図表1に示したゲームでは、「奄美大島に観光客がやってくる」という事象からスタートし、「奄美大島に危機が訪れる」という結末までの連想を事前に与えたうえで、事象間の関係性（矢印で表現されている部分）についてのみグループディスカッションをするスタイルを採用した。さらに、いくつかの例を示すことにより（図表1のAおよびBの部分）、グループディスカッションが円滑に行われるよう配慮した。

小学校児童には、①～③の矢印の具体例をまず挙げてもらい、続いて図表1によって与えられた悪循環のシナリオを食い止めるためにどのような行動をとることができるのかについて、矢印毎に検討・発表を求めることとした。講師（大学生）から一方

図表１　環境連想ゲーム「奄美を救え！！」



的に知識を与えるのではなく、小学校児童自身が考え、意見を交わし合うことにより、環境意識が向上し、小学校児童の内面から行動へのきっかけが生じると考えたからである。

以上のような形式面の変更を行った最大の理由は、環境連想ゲームとダンボールコンポスターとの関連を小学校児童に印象づけたかったためである。小学校児童に自由に連想ゲームを進めさせる方式では、与えられた1時限45分という貴重な時間内でダンボールコンポスターの意義にまで連想が及ぶ可能性は極めて低いと思われた。ストーリーを事前に用意することは小学校児童の自由な発想を制限してしまうことを意味するが、しかしながら、現在まさに自分たちで取り組んでいるダンボールコンポスターが奄美大島の自然環境保全につながっているのだとの理解を引き出すことが、環境授業の最も重要な目標なのである。

環境問題という途方もなく大きな問題に対して、多くの人々は無力感にさいなまれているのではないだろうか。「あまりに小さな存在である自分1人が努力をしても、あまりに大きな環境問題の解決にどれほど貢献できるのか」と。しかしながら、環境問題の解決には市民1人1人の行動が必要とされており、たとえ小さな努力であっても、多くの市民が取り組むことによって大きな成果が生まれる可能性を認識すべき時代なのである[11]。すなわち、小学校児童が毎日のように取り組んでいるダンボールコンポ

11　環境問題の解決を目指すにあたっては、おそらく環境技術の飛躍的な進歩を必要とするであろう。公害問題を克服してきた過程においても、また今日までの環境問題への対応を考えても、環境技術の果たした役割は大きなものであった。
筆者らには、環境技術の役割を否定する意図はない。ここで主張したいのは、環境技術に頼るだけではもはや環境問題の解決をみることは困難だ、ということである。

スターによる生ゴミの処理は、着実に環境問題の解決に資するのであり、奄美大島の自然環境保全に貢献していると理解すべきなのである。筆者らが用意したワークシートには、小学校児童がダンボールコンポスターの真の意義に気づいて欲しいとの願いが込められている。

5-2. 環境授業の進行方法

環境授業は45分で完結させる必要があったため、およそ図表2のような進行スケジュールを計画した。

図表2に示したスケジュールで授業を進めるにあたっては、おおよそ以下の3点の注意事項を事前に認識していた。

第1は、小学校児童にできるだけ自由な雰囲気を与え、発想力を大いに広げることのできる環境作りをすることである。具体的には、授業を進める大学生はエコ星からやってきたエコレンジャーであるとの設定をすることとした。エコ星はエコロジーを大切にしている惑星で、エコレンジャーは地球人に環境の価値を伝えるために世界中を飛び回っている5人組だ。教壇に立つ講師役は2名のエコレンジャーとし、残りのエコレンジャーおよび学生は各グループ（小学校児童のグループ）のディスカッションをサポートする体制をとった。

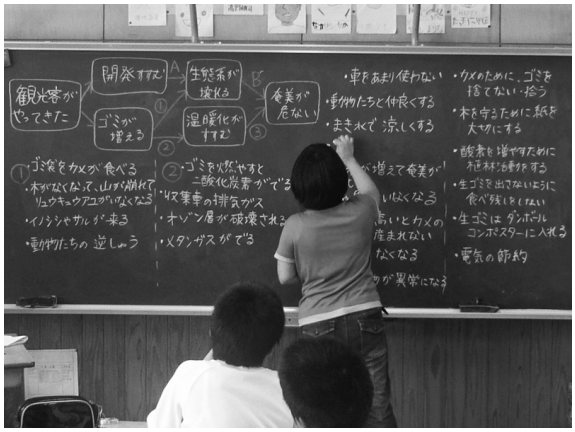
第2は、小学校児童の主体性を引き出す工夫である。環境連想ゲームには唯一絶対の解答があるわけではなく、児童自身が考えた事の全てが正解なのだと伝えることに

図表２　環境授業の進行スケジュール

導入（5分）	**自己紹介**	講師役である大学生は、エコ星から来たエコレンジャーであると自己紹介。
	ワークシートの説明	奄美大島に観光客が多く訪れることにより、何らかの危機が訪れるというストーリーを説明。
	作業の説明	ストーリーに登場する事象間の因果関係および対策活動について検討し、発表してもらうことを説明。
展開１（20分）	**グループディスカッションおよび発表**	グループ毎に「因果関係」についてディスカッションし、意見を発表してもらう。
	評価・解説	発表された見解について、評価および解説を行う。
展開２（15分）	**グループディスカッションおよび発表**	グループ毎に「対策活動」についてディスカッションし、意見を発表してもらう。
まとめ（5分）	**授業のまとめ**	授業のねらいとして、以下の内容を伝える。 ①環境問題は連鎖構造をもっており、小さな問題がやがて大きな問題になる可能性がある。 ②環境問題の連鎖構造は、逆の視点からすると、小さな改善が大きな問題解決につながる可能性があることを示している。 ③奄美大島も例外ではなく、観光客の増加が悪循環につながるのか、好循環につながるのかは、皆さんの環境活動次第である。 ④ダンボールコンポスターは好循環への第一歩であり、実際に環境活動を実施していることを意味している。

写真２　ワークシートの説明

写真３　黒板に発表内容を整理



した。間違いをおそれていてはディスカッションが活性化しないであろうし、ましてや発表を自発的に行うことを期待するのは難しくなるであろう。

第3は、今回用意したワークシートが短絡的な解答につながらないようにすることである。連想の出発点として「観光客の増加」を設定し、結末には「奄美大島の危機」を想定したが、この最悪の結末を回避するためには「観光客を減少させる」との短絡的対応策の出される可能性が常にある。このような短絡的対応策は建設的とは言い難く、観光客の増加と自然環境の保全との両立こそが大切なのだと考えるべきである。両立を実現させるには幾つもの手段・対応策が考えられるが、その1つがダンボールコンポスターの活用に他ならない。

5-3. 小学校児童の連想内容

今回の環境連想ゲームで小学校児童に考察を求めたのは、①ゴミが増えることによって生態系が壊れる、②ゴミが増えることによって地球温暖化が進む、③地球温暖化が進むことによって奄美大島が危機に陥る、という3つの具体的な現象に関してであった。小学校6年生ということもあると思われるが、地球環境問題に関する知識はかなり多く蓄積されており、二酸化炭素による地球温暖化、ゴミ由来のメタンガスの発生および地球温暖化等の見解が数多く出された。筆者らの予想をはるかに超えた高度な内容が含まれていたといえる。

こうした中でも特徴的であったのは、ウミガメとの関係で連想ゲームを進めたグループが存在したことである。①に関して「ウミガメがゴミ袋を餌と間違って食べてしまう」という発想が示されたり、環境ホルモンとの関係から「メス化するのではないか」という意見も出された。また別のグループからは、③に関して「砂浜が消滅すれば、観光業が成立しなくなる」との見解が示され、奄美経済における観光業の重要性を認識していることがうかがわれた。環境連想ゲームを一般的な設定にするのではなく、小学校児童が現に生活している奄美大島を想定したことによって、より身近で具体的な連想を引き出せたといえるだろう。

さらには、②に関して「ゴミを出さないようにする」との見解から発展し、「生ゴミはダンボールコンポスターに入れる」という意見が出された。環境連想ゲームとダンボールコンポスターを関連づけるという環境授業の狙いは、十分に満足できたと評価できよう。

5-4. 環境授業の全体的評価と改善すべき点

今回、赤徳小学校で提供した環境授業は、一定の成果を収めたのではないかと考えている。授業を受けた児童から感想文を受け取っているが、その内容は概ね好評であった。グループディスカッションおよび発表の授業形式を採用したことも好結果につながり、それぞれの児童が自身の見解を導き出し、また今何ができるのか・何をすべきかを認識したように思われる。ダンボールコンポスターの意義についても理解が深まったであろう。

しかしながら、課題とすべきいくつかの点も認識することとなった。

第1は、画一的ではないユニークな発想を引き出すことの難しさである。出版物やマスメディアから得たであろうと思われるいわば常識的な見解は数多く示されたが、子供の目線からの破天荒な見解や奄美大島特有の問題に関連した見解は、予想に反して多くは示されない結果となっている。小学校6年生ともなれば知識の蓄積が進んでおり、この蓄積された知識が逆に発想の障害になっている可能性がある。また、課外活動や様々な体験を多くこなしていく必要性もあると思われ、これによってより具体的で身近な発想と行動がもたらされるものと期待される。

写真４　サポートをする大学生と赤星教諭

第2は、グループディスカッションの難しさである。今回は5人程度のグループを作ったが、活発な意見交換は授業後半にみられ、45分という限られた時間を最大限活用できたというわけではなかった。ディスカッションを促すためには、グループごとに配置したサポート役の果たすべき役割が重要であるように思われた（写真4)。また、授業を提供する側（大学生）が多くの知識を保有しているべきことはもちろん、小学校児童の見解を柔軟に受け止め、発想を広げていける能力が求められることを実感した。

第3は、時間配分である。45分を予定していた環境授業は、実際には60分を超えてしまい、給食の時間を圧迫する結果となった。これも授業提供能力そのものの問題であり、今後の課題として認識し、我々自身が克服していく必要がある。

6. おわりに

平成19年度は、赤徳小学校に『にじいろタウン』を採用いただき、貴重なデータを収集することに成功した。平成20年度以降は、『にじいろタウン』をより広く普及させる活動を試みると同時に、環境連想ゲームを活用した環境授業の提供能力の向上を図りたいと考えている。鹿児島市内での活動を前提としているが、離島は様々なシステムがよりクローズドである特徴を持っており、生ゴミ処理もまた例外ではないため、離島での『にじいろタウン』の普及も重要と認識している。多くの子供達が『にじいろタウン』を訪れ、あそび感覚で環境や食について学んでくれることを期待している。

【参考文献】

大前慶和（2005）,「環境教育および食育教材の開発に向けて――“持続可能な開発

のための教育”の視点からの教材設計――」『経済学論集』64, 2005
大前慶和（2006),「ダンボールコンポスターの環境教育・食育への応用」『第17回廃棄物学会研究発表会講演文集』, 2006
大前慶和（2007）,「ダンボールコンポスターを活用した環境教育教材の提案」『第18回廃棄物学会研究発表会講演文集』, 2007

■研究調査レビュー

奄美黒糖焼酎産業の動向

山本　一哉（鹿児島大学法文学部）

目次

1. はじめに
2. 鹿児島県本格焼酎の製成及び出荷動向
3. 黒糖焼酎の製成及び出荷動向
4. 原料糖の調達を巡る新しい動き
5. おわりに

1. はじめに

焼酎ブームが落ち着き始めたなかで、黒糖焼酎の出荷は依然として好調である。筆者は、以前『奄美ニューズレター』において、焼酎ブームに乗って急成長を続ける奄美の黒糖焼酎産業について、酒税法上の規定、製成及び出荷動向、業界構造の変化、原料糖問題を中心に報告を行った[1]。

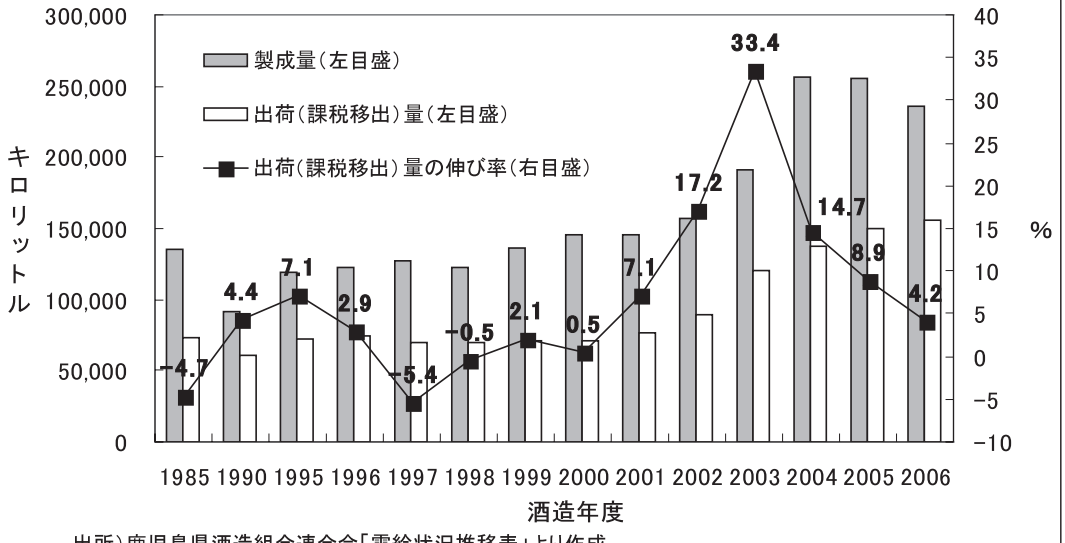
本稿では、2005年度以降を中心に、黒糖焼酎の製成及び出荷動向と奄美産原料糖の調達を巡る新しい動きについて報告したい。

2. 鹿児島県本格焼酎の製成及び出荷動向

2000年代に入って本格化した全国的な焼酎ブームを背景に、鹿児島県の本格焼酎の製成及び出荷量は飛躍的に増大した。すでに焼酎ブームにも一服感はあるものの、依然として芋焼酎の売れ行きが好調で、出荷量は増加を続けている。

図1にあるように、2001酒造年度から増

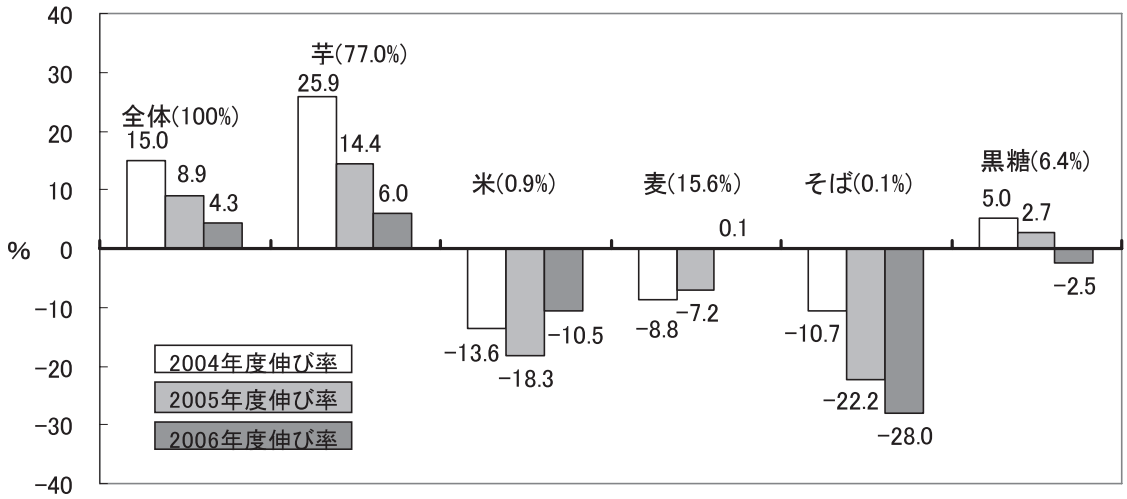
図１　鹿児島県本格焼酎の製成及び出荷量の推移



出所）鹿児島県酒造組合連合会「需給状況推移表」より作成
注）酒造年度は7月～翌年6月、数量はアルコール25度換算

1　山本一哉「奄美の黒糖焼酎産業について（1）」『奄美ニューズレター 』（17）、12～21頁、2005年4月、「奄美の黒糖焼酎産業について（2）－原料糖問題」『奄美ニューズレター』（18）、39～47頁、2005年5月、「奄美の黒糖焼酎産業について（3）」『奄美ニューズレター』（20）、19～27頁、2005年7月。

図２　鹿児島県本格焼酎の原料別出荷量の伸び率



出所）鹿児島県酒造組合連合会資料より作成
注1）伸び率はアルコール25度換算していない出荷量データに基づく
注2）カッコ内のパーセントは2006酒造年度の総出荷量に占める割合

加を始めた本格焼酎の製成量は2004年度には過去最高の25.6万キロリットル（前年度比34.2％増）を記録した。その後減少傾向にあるものの、2006年度も23.6万キロリットル（前年度比7.8％減）と高水準を維持している。一方、出荷量（課税移出量）[2]は、2003酒造年度の対前年度比33.4％増をピークに増加ペースは低下傾向にあるものの、依然として増加を続けており、2006年度には過去最高の15.6万キロリットル（対前年度4.2％増）を記録した[3]。これで出荷量は8年連続で増加したことになる。この出荷量の伸びを支えているのが、鹿児島県の焼酎出荷量の77％を占める芋焼酎である。**図2**は原料別にみた焼酎出荷量の伸び率である。米、麦、そば、黒糖焼酎の出荷量が減少傾向にあるなかで、一時期の勢いはないものの芋だけが増加を続けている。2006年度の芋焼酎の出荷量は11.9万キロリットル（対前年度4.2％増）で、9年連続で増加した。

今回の焼酎ブームも過去のブーム[4]同様、県外市場主導型だが、統計的には県内出荷量も大幅に増加している。2001酒造年度と2006年度の出荷量を比較すると、県外出荷が4.2万キロリットルから8.7万キロリットルへ約2.1倍増だったのに対して、県内出荷も3.5万キロリットルから6.9万キロリットルへと約2倍に増加した[5]。特に2006年度に関しては、県外出荷の前年度比が1.2％増にとどまったのに対して、県内出荷は8.2％と高い伸び率を維持している。ただし、鹿児島県酒造組合連合会によると、県内の焼酎消費量は3.3万～3.4万キロリットル程度であり、県内出荷の多くが小売店等を通じて県外市場に流出している可能性が高い[6]。

2　鹿児島県で製成された焼酎の一部は、「未納税移出」（いわゆる「桶売り」）として大分県など県外の焼酎メーカーに出荷されている。ちなみに、2006酒造年度の「県外未納税移出」は61.4万キロリットルで、全移出量の約3割であった。

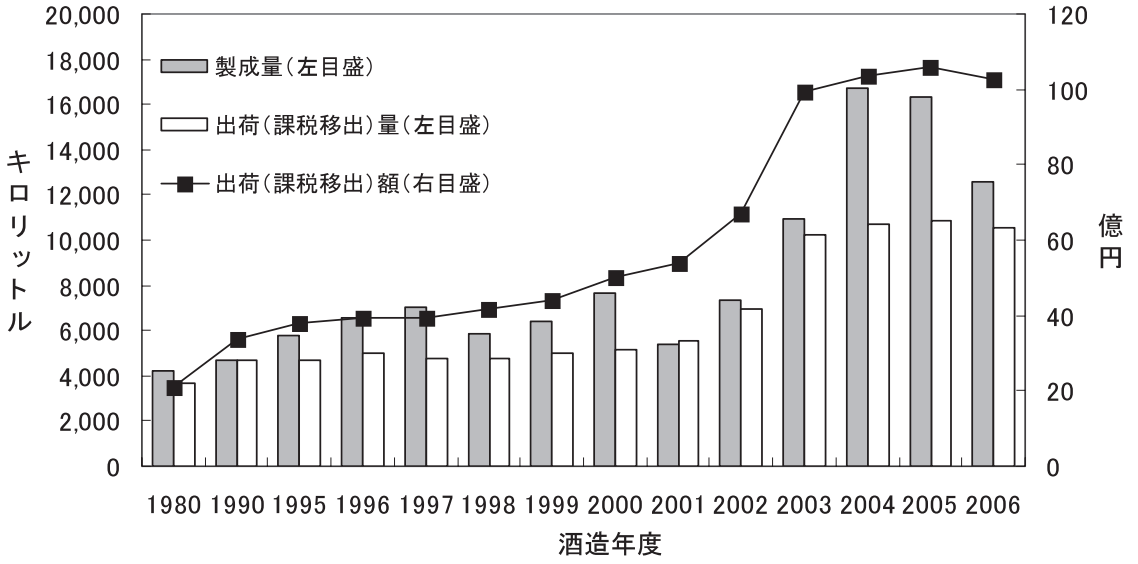
3　鹿児島県酒造組合連合会では、東北や北海道でまだ需要の伸びる余地があり、2007酒造年度の出荷量は16万トン台に達すると予測している（『南日本新聞』2007年8月3日）。

4　1980年代前半の麦焼酎、チューハイブーム。

5　2006年度の出荷量の55.7％が県外出荷で、44.3％が県内出荷であった。

6　『南海日日新聞』（2007年8月9日）による。

図３　黒糖焼酎の製成・出荷量及び出荷額の推移



出所）奄美大島酒造組合資料及び『南海日日新聞』（2007年8月9日）より作成
注）酒造年度は7月～翌年6月、数量はアルコール25度換算、2006酒造年度課税移出額は筆者推計

3. 黒糖焼酎の製成及び出荷動向

県外需要の伸びに牽引されて2002酒造年度頃から急増した黒糖焼酎の製成量も2004年度の16,694キロリットル（過去最高）をピークに減少傾向にあり、2006年度は12,609キロリットルで、前年度比22.6％減と大きく減少した（**図3**）。しかし、一部の大手黒糖焼酎メーカーでは、製造及び貯蔵設備の増強を行い、製成量を拡大させている。例えば、奄美大島酒造（本社：奄美市、工場：龍郷町）は、旧工場と同じ敷地内に自動製麹装置など最新式の製造設備を完備した新工場を建設し、2006年から本格的な生産を開始した。新工場の建設により、奄美大島酒造の生産能力は以前の約2倍になった。また、業界最大手の町田酒造（龍郷町）も、2006年に貯蔵タンクを増設し、貯蔵能力を2倍に増強した。

一方、黒糖焼酎の出荷量は、2003年度に前年度比47.9％増と大幅な伸びを記録し、初めて1万キロリットルを突破した後、伸びは鈍化したものの、高水準で安定している。2006年度の出荷量は、1998年度以来8年ぶりに前年度比で減少（3.1％減）したが、依然として1万キロリットルの大台を維持している。また、同年度出荷額（課税移出額）は4年連続で100億円を突破した。

4. 原料糖の調達を巡る新しい動き

（1）原料糖の調達状況

2006酒造年度における黒糖焼酎業界全体の原料糖使用量は製成量から推計して約4,000トンと思われる[7]。奄美では、黒糖焼酎の原料糖のほとんどを沖縄と外国に依存しており、地元奄美産の使用は全体の1割（300～400トン）程度と思われる[8]。現在、奄美大島酒造協同組合が沖縄産を年1,000トン程度、加計呂麻産を5トン程度共同購

7　黒糖焼酎1リットルの製成に320gの原料糖が必要として計算した。

8　2004年に鹿児島県地域経済研究所が実施したアンケート調査（18メーカーの単純平均値）では、原料糖の63.7％が沖縄産、34.0％が外国産、残りの2.3％が奄美産という結果であった（鹿児島県地域経済研究所「黒糖焼酎の生きる道」『地域経済情報』、No.173、2004年8月）。

表１　奄美産含みつ糖の仕入（使用）状況

購入メーカー／年期	奄美大島開運酒造（宇検村）	朝日酒造（喜界島町）	富田酒造（奄美市）	徳田酒造（和泊町）	奄美大島酒造（龍郷町）＊他	奄美大島酒造協同組合共同購入
2003／2004	39.0t	･･･	･･･	0	0	4.5t
2004／2005	25.2t	･･･	･･･	0	150t	3.0t
2005／2006	21.5t	･･･	･･･	4.9t	400t	4.5t
2006／2007	36.5t	5.2t	･･･	0	315t	6.0t
含みつ糖製造業者等	元気の出る公社（宇検村）	朝日酒造自社製糖場（喜界島町）	徳南製糖（伊仙町）	沖永良部島小型製糖場（和泊町）	富国製糖（奄美市）	加計呂麻島小型製糖場

出所）鹿児島県農政部農産園芸課特産作物係資料（「市町村報告」）、富国製糖資料、新聞報道等
注1）＊工場所在地
注2）･･･は使用量不明

入し、アンケートに基づいて組合加盟メーカーに配分している。不足する分は、各メーカーが独自に調達している。

筆者の調査では、奄美産原料糖（組合共同購入の加計呂麻産を除く）を恒常的に使用している酒造メーカーは、奄美大島開運酒造（宇検村）、朝日酒造（喜界町）、富田酒造（奄美市）、奄美大島酒造（龍郷町）など5社程度と見られる[9]（**表1**）。2006年度に奄美群島で生産された含みつ糖は約900トンだったが、その内の約4割程度が黒糖焼酎の原料として使用されたものと推計される。

以下、奄美産原料糖の使用状況について酒造メーカーごとに紹介する。奄美大島開運酒造は、1997年度より宇検村内の「元気の出る公社」から原料糖を仕入れており、2006年度の購入量は36.5トンであった[10]。

喜界島の朝日酒造は、自社でサトウキビを栽培しており、それを原料として自社製糖場で製造した原料糖を2001年度から毎年度5～7トン程度使用している。2001年度に初めて自社製原料糖を100％使用して製造した焼酎が、5年間の貯蔵を経て、2007年はじめに「陽出る國の銘酒2001（5年熟成原酒・44度）」としてようやく市場に出荷された。

奄美市の富田酒造は徳之島伊仙町の徳南製糖から原料糖を仕入れており、これを100％使用して「まーらん船（33度）」を製造している[11]。

沖永良部島の徳田酒造は、2005年度、スポット的に地元の個人業者から原料糖として黒糖4.9トンを購入した[12]。徳田酒造によると、地元産原料糖は価格が高いことから、今後も使用するかどうかは検討中とのことであった。

現在、最も多くの奄美産原料糖を使用し

9　奄美の黒糖焼酎メーカーは全部で25社である。
10　宇検村産原料糖を100％使用した銘柄は、「ネリヤカナヤ（25度）」と「ＦＡＵ（44度）」の2つ。
11　富田酒造が徳南製糖から購入している黒糖はもともと酒造用（富田酒造用）に製造されたものではなく、一般に販売されているものである。徳南製糖によると、富田酒造は最高品質の（最も高価な）黒糖を購入しているとのことである。
12　徳田酒造は、竿田酒造、沖酒造、新崎酒造と共同瓶詰め会社を組織しており、その中心的なメーカーである。

表２　富国製糖による含みつ糖の生産と販売

	生産量	販　売	
		販売先	販売量
2004／2005年期	150t	奄美大島酒造	150t
2005／2006年期	400t	奄美大島酒造	337t
		他3社	63t
2006／2007年期	315t	奄美大島酒造	300t
		他2社	15t

出所）富国製糖

表３　原料糖１ケース（30kg）の仕入価格

奄美大島酒造協同組合共同購入分[1)]	沖縄産（品質1等）	7,550円
	加計呂麻島産	7,150円
富国製糖産		9,450円
地元小型製糖場産[2)]		21,000円
外国産		4,500～5,000円

出所）鹿児島県農政部資料及び聞き取り調査
注1）組合からメーカーへの売却価格であり、沖縄産は組合手数料400円を含む
注2）2メーカーに対して聞き取り調査を行ったが同額であった

ているのが、奄美大島酒造（龍郷町）である。奄美大島酒造は、2004年度から同じマルエーグループに所属する富国製糖に原料糖の委託生産を開始した。富国製糖は分みつ糖製造会社だが、1996～1998年度まで3年間、奄美大島酒造協同組合の委託を受けて酒造用含みつ糖を生産していた実績がある[13]。**表2**にあるように、奄美大島酒造は、2004年度に150トン、2005年度に337トン、2006年度に300トンを購入している。奄美大島酒造によると、2006年度の原料糖の仕入については、7割が奄美産、残り3割が沖縄産だったが、2007年度から原料糖のすべてを奄美産（富国製糖産）に切り替える計画だという。また富国製糖は、2005年度より、原料糖の一部を奄美大島酒造以外の酒造メーカー数社にも販売している[14]（**表2**）。

奄美産原料糖の使用が少ない最大の理由は、価格が高いことにある。**表3**にあるように、奄美の小型製糖場で製造された原料糖の価格は1ケース（30kg）当たり約21,000円で、沖縄産の約3倍、外国産の約4倍と非常に高い。一方、富国製糖産は同じ奄美産だが、生産量が多いことから、1ケース当たり9,450円と割安である[15]。ただ、それでも沖縄産と比べると約2,000円も高い。沖縄

13　1996年に89トン、97年に700トン、98年には600トンを生産したが、組合からの申し出で5年間という基本契約期間終了を待たずに委託生産は打ち切られた。この経緯については、前掲「奄美の黒糖焼酎産業について（2）」の41頁を参照のこと。

14　富国製糖によると、酒造メーカー側から購入の希望があったとのことであった。

15　1996～1998年当時、奄美大島酒造協同組合への販売価格は、1ケース当たり9,000円であった。

産が安いのは、1工場当たりの生産規模が大きいこともあるが、国と県から補助金が出ていることによる[16][17]。

(2) 徳之島南西糖業への原料糖の委託生産

奄美大島酒造協同組合は、2006年度の通常総会（2006年11月20日開催）で、地元奄美産原料糖の安定的な確保を目的に、南西糖業（徳之島）への原料糖の委託生産を事業計画に組み込み、現在も交渉を行っている。南西糖業は徳之島に2つの工場を持つ奄美最大の分みつ糖製造会社であり、含みつ糖の製造は一切行っていない[18]。

組合の事業計画によると、委託生産量は年間900トン程度で、価格は1ケース（30kg）当たり8,400円を予定している[19]。価格的には外国産の2倍弱で、組合が共同購入している沖縄産よりも1,000円程度割高だが、奄美の小型製糖場産の半値以下である。また奄美大島酒造が仕入れている富国製糖産よりも1,000円程度安い。

しかし、総会での議決から1年以上が経過した2007年12月末現在、まだ契約には至っていない[20]。この件について、組合と南西糖業の双方に話を聞いてみたが、契約締結には以下のような多くの問題をクリアする必要があるようだ。第一に、サトウキビ不足の問題である。徳之島だけの問題ではないが、農家の高齢化や転作などの影響でサトウキビの収穫量は減少傾向にあり、南西糖業では本業の分みつ糖製造に必要なサトウキビが不足する状況が続いている[21]。徳之島でのサトウキビ生産量は、ピーク時の平成元年には約37万トンあったが、現在では約20万トンまで減少している[22]。南西糖業はかつて徳之島に3つの工場を持っていたが、原料キビ不足による操業率の低下から2001年に平土野工場（天城町）を閉鎖した[23]。このような状況では、含みつ糖を製造する余力はない。第二に、（契約）価格の問題である。組合側が提示している1ケース当たり8,400円では安すぎて採算がとれない。沖縄県のように補助金が付かない限りこの価格での契約は難しい。第三に、含みつ糖製造施設の問題である。南西糖業が含みつ糖を製造するためには、工場施設の改修（製造ラインの増設）が必要であり、それには多額の投資資金が必要となる。先

16　沖縄県の含みつ糖は5社7工場で生産されており、2006年度の生産量は7,916トンで奄美の約9倍であった。また、最も生産量が多かったのは宮古製糖多良間工場で3,377トンであった。

17　沖縄県離島の含みつ糖生産業者に対しては、販売価格と生産コストの差額補填として、毎年度約10～11億円の「経営安定資金」が交付されている。補助金の2/3を国が負担しており、2007年度については、内閣府が「含みつ糖対策費補助金」として、約6億7千万円を予算計上している。沖縄産含みつ糖生産に対する補助金制度の詳細については、前掲「奄美の黒糖焼酎産業について(2)」の42～43頁を参照のこと。

18　南西糖業の製糖工場は伊仙町（伊仙工場）と徳之島町（徳和瀬工場）にある。

19　『大島新聞』(2006年11月21日)、『南海日日新聞』(2006年11月21日)。

20　2007年10月29日に開催された2007年度組合通常総会においても、事業計画として前年度に引き続き南西糖業と交渉を続けていくことが承認された。

21　鹿児島県は、国の「さとうきび増産プロジェクト基本方針」に基づき、2006年6月に各島及び県全体の生産目標や取組方向を整理した「さとうきび増産計画（2006～2015年）」を策定した（詳細は鹿児島県HP参照のこと）。2006年度に関しては、県全体で、収穫面積9,055ha（計画対比100%）、単収6,266kg（計画対比103%）、生産量567,373t（計画対比103%）と増産計画目標をほぼ達成した。

22　徳之島のサトウキビ生産量は、2004、2005年度と2年連続で20万トンを下回っていたが、2006年度には約21万トンまで増加した。

23　平土野工場は、1997年4月からすでに操業を停止していた。この工場閉鎖に当たり、南西糖業は農林水産省より「産業活力再生特別措置法」に基づく事業再構築計画の変更認定を受けた。南西糖業によると、現在の2工場を維持するのに年間約23万トンの原料キビが必要である。

に紹介した富国製糖は、1996年度から開始された組合向け酒造用含みつ糖製造のために約1億円をかけて工場の改修を行った[24]。

5. おわりに

奄美黒糖焼酎業界の今後の大きな課題は、焼酎ブームが去った以降、いかに黒糖焼酎の消費を維持・拡大していくかということと、いかに地元奄美産原料糖の確保を図っていくかということであろう[25]。2006年度より業界最大手の町田酒造が組合に加盟し、これで1社を除いてすべての黒糖焼酎メーカーと共同瓶詰め会社が組合に加盟したことになる。これによって業界一体となった取り組みを行える体制がほぼ整った[26]。奄美大島酒造組合では、2007年5月に、毎年5月9、10日（こ・く・とう）を「奄美黒糖焼酎の日」に制定し、黒糖焼酎の消費拡大を全国にアピールして行くことになった。一方、原料糖問題については、現在交渉中の南西糖業との委託生産契約がうまくいくことを期待したいが、沖縄県のような補助金制度が新設でもされない限りかなり難しいのではないだろうか。将来的にこれを実現するためにも、まずは奄美でのサトウキビの増産を図ることが急務であろう[27]。

今回の調査を通じて印象的だったのは、多くの関係者が、今回の焼酎ブームの最大の収穫として、全国的に「黒糖焼酎の認知度」が高まったことを挙げていたことだ。これまでは、焼酎といえば芋や麦で、黒糖焼酎は「その他の焼酎」といった扱いでしかなかったが、やっと全国の消費者に「奄美の黒糖焼酎」として認識してもらえたようだ。

最後に、調査にご協力くださった、奄美大島酒造組合、奄美大島酒造協同組合、鹿児島県酒造組合、奄美大島酒造、富田酒造、町田酒造、奄美大島にしかわ酒造、高岡醸造、奄美酒類、徳田酒造、新納酒造、朝日酒造、喜界島酒造、南西糖業、富国製糖、徳南製糖、鹿児島県庁農政部農産園芸課糖業特産作物係、喜界島町役場、和泊町役場の皆様にお礼申し上げたい。

24　（社）糖業協会編『現代日本糖業史』、丸善プラネット、2002年、286頁。

25　組合の2007年度事業計画では、①需要拡大と②焼酎粕を利用した商品開発（への協力）が2本柱として挙げられている（『南海日日新聞』2007年10月30日）。また組合では、「地域団体商標権」の取得をめざしている。

26　2007年11月１日、奄美大島酒造組合を含む県内11の酒造組合を１本化した「鹿児島県酒造組合」が発足した。

27　2007年度、国の砂糖政策が見直され、サトウキビ及び砂糖生産に対する補助金制度が変更になった。2007年産サトウキビから、これまでの「最低生産者価格制度」が廃止され、市場の需給を反映した取引価格が形成される制度が導入された。これに伴って、交付金（標準的な生産コスト－製糖工場への販売額）は国（農畜産振興機構）から直接キビ農家へ支払われることになった。ただし、交付金が給付されるのは生産規模等一定の要件を満たしたキビ農家に限定される。一方、製糖会社への交付金については存続されるが、経営の合理化が交付の条件となる。新制度については、農畜産振興機構 HP を参照のこと（http://alic.lin.go.jp/sugarstarch/index.html）。

■しまゆむた

奄美民俗文化の事例
～徳之島井之川和田キヨ嫗の生活史（３）～

本田　碩孝（徳之島郷土研究会会長）

凡例

凡例は、ほとんど標題の「和田キヨ嫗の生活史（１）」（奄美ニューズレターNO.31鹿児島大学奄美委員会2007年６月）に準ずる。①必要と思う意訳に若干の解説も含める。②話は次々と続いているが、適当に切り、筆者がこれと思う項目名をつけて項を新たにしてある。③類似項目などをまとめるべきだと思うがここでは話順のままにしてある。

方言表記は正確にされてはいない。例えば前が軽くつまる音が入る場合ッヤ（家）であるが、ヤという場合、ヤーだけの場合などあるように思う。

注

『奄美方言～カナ文字の書き方～』岡村隆博著（南方新社２００７年）があるので参照して頂きたい。但し、天城町浅間（岡村氏出身地）と筆者の生地井之川とはかなり違う。高校時代（昭和３５年頃)、天城町の学友が方言で話し合っているのが良く聞き取れなかったことを覚えている。

０、はじめに

小稿は1990年１月１日採録分と1991年１月１日採録分の一部である（残りは次回の予定である)。

項目

１童と赤毛牛の目、２砂糖小屋泊まり、３薩摩芋泥棒、４麦盗人の恩返し、５蘇鉄の実、６盗人神が付く、７こそ泥棒、８漁をする場、９青酸カリ漁、10空襲前後の製糖、11空襲時期の暮し

１、童と赤毛牛の目

――牛ぬしどぅぬ話は聞ちねーらんせ（牛盗人の仲間に入る話をするが知らなった)。

――われんや、アーウシヌぬ目ぃん玉・・。

うりや、あの　だってごろあなてぃぬ。なんぐぁ　聞きはんじゃちゃんがに　しゅしが。「あねー、あーむぬ目ぃぬ　おとろあね、ゆーべぃぬ　アーブシャぬ目ぃとぅ似ちゅんでえっ」ち。ぶーんとぅ、くぁにかまるとぅやえっ（注１)。いちから、うん牛をば　アーブシャこーてぃ（盗でぃ）山なてぃ　くっちゃんがら。目ぃ　しきゃとぅたんとぅ。うんくぁが　にちゃんとぅ、「牛がうらん」ち、さばくてぃ　あっちゃんとぅ。うんから　うやぬ目ぃってごろあ。あじゃが　くっち　かーでぃあむなてぃ。

「あねー　おとろっけ、ゆーべぃぬアーブシャぬ目ぃとぅ似ちゅん」てごろあちゅてぃ（笑いながら）話ぬあーし。

目ぃーしきゃてぃ　にしたんとぅ、「あーぶしゃぬ目ぃに　しゅん」ち、うっしゅてぃごろあ、っわっきゃ爺がら言ゅーたしが。

牛盗ぃだり　くっちかだーり、むーるうむなてぃや盗ぃみなてぃや、昔ぬちゅや。（意訳）赤毛牛を盗んで殺して食べた。探しに来た。子供が出てきたので、父が目を光らせ、合図して制止しようとした。「父の目はゆうべの赤毛牛の目のようだ」と言ったのでばれたと言う話。「童は赤毛牛の目」という俚諺があり、その由来話である。「赤毛牛の目」と言われるが、私は童をつけている。井之川だけでも５話以上採録しており、かなり知られた話だったようだ。

注
1）他人に知らされたり、密告されたりすることを「かまり」「かまった」など直訳では「食べる」に関わる言葉で言う。

2、砂糖小屋と泊まり

あん、ぬっちが、ありたが　サタヤマなてぃ　サタ、くんじゃち　とぅーてぃぬまり　また　止ぅめぃじる　しじてぃ　ヤかち　むーる　きゅーむなてぃ。うがししっちーから　むーる　終戦後、だぬちゅがら　サタ盗ぃまるむなてぃ。うんからヤドゥリな　とぅまるげし　なたんとぅ。

保（さん）。たーきゃインあたんがいー、アーイン　ふてかーインあたしが。うんインがちっち。かましゅむなてぃ　わんふねぃんきゃ　残りかましゅむなてぃ。くんでや、うりが番し　しゅーたんとぅ。うにんま　本当ま　あしが、アーインぬ　サタヌシドゥぬちゃんからえっ、シュダっきうっくち行じゃんちだ。うがしさんとぅ、「はーっ、ゆーべぃ　サタヌシドゥぬ　ちーあり　あね」ち言ちえっ。うがし　各サタヤドゥリ　荒らさるたんべちよ。盗ぃまるたんべちよ。

サタし　しまち、うちゅち。うにん　また止めぃ汁し　しじてぃ　きゅーむ　あたんせえっ。

とぅまるげし　なたんとぅ　うねっ。インが　うんなてぃ　あね。保シギにゃがインあたわ。アーインぬ　ふてかーインあたんちよ。カンニバルなえっ、あむしゃんとぅきゃが。うんインぬ　うっくち　サタヌシドゥぬ　しーちゃんとぅ。シュダんたな　うっくち。 昔がり、盗ぃどぅべーどぅしゅーてぃあらや。

（意訳）暗くなるまで製糖をすると、砂糖入り樽を小屋に置き、翌朝の製糖のために「止め汁」という半ばキビ汁を炊いてから帰った。その後、泥棒に砂糖樽を盗まれたりした。番犬が泥棒を追っかけて行った。

旧暦の正月が終ると製糖工場に泊り込みで製糖に従事する。それは泥棒予防もあった。

牛盗人の話から砂糖泥棒の話に続いている。

3、薩摩芋泥棒（ハンシンヌシドゥ）

ふーん、ハンシン盗ぃみ。終戦後がり、うがんがぬ　ちゅ、盗ぃまってぃ。

「だーぬハンシンにゅんが、でぃんハンシンにゅんが。だぬハンシンにゅんが　あめー」ち言ちゃんちゅてぃ、話ぬあむ　あたんせ。

ゆるゆる　しっちかや。

よーはてぃ　くれり　ならんけぃどぅ、ほーあ　しーなてぃやっ。盗ぃどぅや、恥ま法ま　ぬーんま　ねんしじよ。

（意訳）終戦後など芋泥棒など多くおり、あちこちの畑で盗まれていた。ある泥棒の家では「どこの芋を煮ようか」と話していたそうな。ひもじくて我慢できないからこそ盗みもするだろうからね。盗人には恥も法もない。

4、麦盗人の恩返し

福富ムッタキしゅたが、おやほがなしぬ財産家なてぃえっ。カンニバルぬ　七反ばてぃ　みー、麦つくてぃ　あたんとぅえっ、カナミから舟ぃ　くーじ　とぅまりぬ。シュダぬとぅまりぬ　うんとぬ、港なーとぅんせえっ（ゐん）、うんとな舟ぃちきてぃ。うまぬ　麦刈りくげらち、うがしし。あの、うんが　なーちゃま　きゅんがら　あてぃねむなてぃち　番しゅーたんとぅ、きゃきゃ　しっち刈るむなてぃ、

「やねぃぬ種ぃぐぁ　のーちゅてぃ　くーりよ」ち、うがし言ちゃんとぅ。

刈てぃあんしこ　むーる　むっち行じゃんしじあしえっ。むっち行じ、しゃんとぅ。

うんから　うん　あけぃまどぅしや、うん種ぃし　麦やーと　つくてぃ、
「おぼらだれん」ち、とーら　たーちちがらむっち　ちゃんち。
うがし　うんちゅきゃや　うっくしんきゃ　さーだたんち。
「種ぃぐぁだけぃや、のーち　くーり」ち。うがし　くぅい　けーたんち。
刈とぅんとえっ、刈とぅんと　うがし言ゃーたんとぅきゃ。刈てぃあんしこむっち行じゃんしじあしえっ。よーある（注1）むんなてぃやっ。いちか　向こてぃ、あんから　あがん。
――いきゃし金見ちわかれたんがや。
金見から、
「っうりが　うかげぃし命生きちゃん」ち。
――あー、お礼しが　ちゃんち。
お礼しがちゃんとぅやっ。
「うりがむん　うがしい盗ぃでぃ行じえっ、種ぃし　植ぃーたんとぅ。うりし命生きちゃん」ち。「命ぬ恩人」ち言ち、とーらたーちごろあ　いきゃさちごろあ　むっちお礼言―が　ちゃんち。うがしか、
「だーかが」ち言ちゃんとぅ、「金見」ち言ちゃんち。

（意訳）福富家は財産家で神之嶺にある七反の畑いっぱい麦を植えていた。収穫間じかに金見（徳之島の一番北側にある集落）から小舟に乗って麦盗みに来ていた。翌日も来るだろうと番をしていたらまた来た。「来年の種用だけは残しておいてね」と声をかけた。刈りとった分の麦は盗み舟に積んで行ったのでしょうね。翌年には2俵持って「有難う」とお礼にきたって。「お陰様で命が助かった」と。

現実にはありそうもないが、おおらかな共助時代の精神を彷彿させ民話の発生を思わせる話である。

注

1）空腹を意味する「よーあ」「よーは」は、両方「あ」「は」に聞こえる。

5、蘇鉄の実（シュティチぬナリ）

金見やまた、あんシュティチや、金見かどぅ　かんま　きーむんで。アーシュティチや、こーてぃ　きーむんちだ。あれぃや、また　ウーシマぬ　あまかちあし。ちきゃーむなてぃ、あまとぅあまとぅや。ちきゃーむなてぃ・・・。

ソテツジャングルンんきゃ、専門あんせ。（意訳）蘇鉄の実は、金見方面から来た。井之川でも金儲けのため「ナリハンギィリ（蘇鉄の実運び）」をした人々がいる。

また蘇鉄の元祖は手々（瀬戸内町諸鈍から来たという伝説が金見の隣集落）にあると言う。現在は金見の蘇鉄ジャングルが名所。

現在、他人の蘇鉄の実を盗る人がいるそうだ。普通の人々は食糧として使うこともなくなったからだろう。一部では蘇鉄味噌加工もしている。

6、盗人神が付く（ヌシドゥガミがチキュン）

――盗ぃどぅや、盗ぃどぅ神様ぬちっちゅんち・・。

盗ぃどぅや、盗ぃどぅ　しーちけたんげか、盗ぃどぅ神様ぬちっち離れらんち、わきゃうやんきゃま言ゅーてぃだ。

カントヌシチジネィんきゃ、盗ぃどぅしーかやっ、神様ぬちっち　ちゃんげか離れらんち。ちゅぬヤーか　塵ぐみちゅ盗らむんち。わきゃ　うやんきゃ言ゅーてぃだ。なーや、うっしゅんくとぅ　ねんせえっ。

うがしあしがえっ、しき流れ、しき流れ、うがっさ、手ぃぐせぬ　わっさん　くぁーまがや、やっぱり手ぃぐせぬ　わーさんち言―や言ゅんせえっ。
――うやぬ　しゅーむん　にーちゅし。
うやぬ　しゅーむん　にち。っわっきゃ

うやんきゃ　うがし言ゅーてぃだ。
「わたな　くぁぬ　あーむしかやっ、ふちく　なーかち手ぃちゅ　ちっくまむん」ち。
「うがし　入―てぃか　くぁが自然的に手ぃ入―るんげしなるん」ち。
　うがしなてぃ　なまあしが、くせ　わーさんせ。・・・(小声で不明)。
　昔うやがなしや、言ちあんしじやっ。ちゅぬむんきゃ　とぅたんげか　うん精神や、くぁに　むーる乗り移るむ。くぁに　むーる　ぬり移とぅむなてぃ　決して悪いこときゃ　しーなち。
「盗ぃどぅや、くっちゃんてぃま　のーら。ぬーさんてぃま　のーら、うむさーだてぃか　のーらん」ちえっ。
(意訳)盗人に神様が付く。特にカントゥヌシチジネィ(辛の未の日)に盗みをすると盗人神が付く。人の家に行ってもゴミすらも懐に入れてはいけないと言う。
　盗みをするのもシキナガレ(ヒキ流れ・系統的)ではないか。「親がするのを子が見て真似るのでしょうね」。「子を孕むと懐に手を入れるな。自然に子が手を入れるようになる」と親は言った。御先祖は良く伝えている。「人のものをとるとその精神は子に乗り移る」と。
「盗人は殺しても直らない。精神が伝わる」。
　注
1)奄美民話集2『吉永イクマツ嫗昔話集』(拙編1984年、住用村・現奄美市)に「泥棒のへらぬ訳」(172頁)がある。
　奄美民話集3『池水ツル嫗昔話集』拙編1988年(徳之島井之川)に「盗人神付きの子」(173頁)がある。

7、こそ泥棒

――トゥユタダ(豊山豊忠氏・故人)にゃ、ヤな、なま鍵けーてぃ　あれるんだ(ぬん)。鍵けーとぅんち。
　トュタダにゃ、なま(鍵けーとぅん)。盗ぃどぅぬ　をぅーわっ。うがしか　うんめぐらぬこそ泥じゃやっ。はひんぎゃえーっ。
　ヤーヤ行じ、むーる　抱きゃげぃてぃしっち。ヤち　ちみゅんちゅ　あたんせ。
　Tち言ゅんちゅや、昔や、はる行じえっ、はてばん　しゅーむ。ぬっち言ゅーむんあたんがい。うり　しゅんちゅ　あたしがえっ。盗ぃどぅが　をぅーむんなてぃ。しゅんちゅ　あたしが。
　うんあまや、また　目ぃはぎぃはぎぃとぅし　うむしゅんちゅ　あたしが。うり、ゆる　なたんげぇか。昼や、しぎゅとぅさんごしゅてぃ。ゆるなたんげぇえかゆるじぎゅとぅし。ヤーヤめぃぐてぃ　あむしゅんちゅてぃ。タムン　むーる抱きゃげぃてぃ　ヤーな　じーとぅ。
「山から生ダムンや　はんげぃらしが、ヤーな　しょーがちダムンちでぃあむ　にーちんにぇえっ。あり　ちゅ－ぬタムンだきゃげぃてぃ　ちみむんだ」ち言ゅん話ぬ　あたんせえっ(笑い)。きょーでぬ　ちゅぬ言ちゃしが。やっぱり、うっしゅんちゅや、うがし　しゅーげしぬ・・・。
　ぐみ　ちゅしじま　たまがるんちゅやとぅりきらり。へっちゃらち　にゅーんちゅや、堂々とぅ　とぅりゅり。性質や。むーる　うやからぬ　流れあらんかや。
(意訳)「豊山豊忠叔父宅は、鍵をかけるよ」と。「はひんぎゃえーっ(驚いた時の感嘆詞)」。盗んできたのを積み上げる人もいる。昔、息子は頼まれて畑に泥棒が来ないか番していた。その母は夜仕事(泥棒)し、山に行くのは見えないが正月用薪がいつのまにか軒下に積み上げられていた。

シマでは、外出時など家に鍵をかけることはなかった。現在でも旅に出たりしなければかけない人もいる。

（以下、1991「平成３」年１月１日採録）

８、漁をする場（ッイュトゥリドン）

行きゅたしがえーっち。めぃじゃしゅたしがえっ、なーんきゃ　ぬーんま　をぅらむ。

――渡てぃ　行きだれんや。ヰノナをば。

くまから行じから、ナガサキハナからうんなげーり、ワタンジ。しゅぬ満ちゅんせえっ、ワタンジくいてぃ　じーとぅ　うきかち　行きあたんちよ。うがし　くんほうぬ　はなぬうきぬ方　あたしがえっ。またウーグモリぬあたしが。ゆる　むーるが青酸カリむっち行じ入ーるげし　なたんとぅきゃやっ。うーんなり、ッイュをぅらんごなてぃ。

（意訳）珊瑚礁には、あちこちに礁湖（クモリ、海水溜り）がある。魚介類が採れた。青酸カリを使うようになり魚はほとんど獲れなくなった。

注

海岸や礁湖の地名など地図上（作成も必要）に記入していく必要は感じる。地名研究者も島では育っていないのが残念である。

９、青酸カリ漁

（１）青酸カリの流行時

青酸カリち言ゅーむん　流行ちけぃたんとぅきゃやっ。

――青酸カリぬ流行や、昭和ぬ何年べだれんがや。

昭和ぬ24、25年べ　あらんせ。

――復帰しからだれんじゃわ。

復帰さん前　あらんせ。

（意訳）「青酸カリは何時頃流行ったか」「戦後の復帰前だろう」。密貿易が行われたと聞く。そんな時代の魚とりの思い出話である。当時はドラムカンで買えたのだろうか。密貿易品のひとつだったのだろう。

（２）漁慰み１（ギューナクサミ１）

うがし、クシぬウィーノ。うま　くもりぬ池ぃに　しゅんと　あんせ。うんな、また、えっ　かっしゅるマンガラぬ　あがとぅるとぅや。舟ぃし　なーか行きゅんちゅや、おーじらんしこ　とぅるたしが。うんか　てぃちマンガラぬ　浦かちしっちか、トゥギャむっちゅんちゅや。わきゃにセし　しきゅんちしか　きっさ　ひんぎりあんせね。ひんぎぃてぃさんとぅ。

（意訳）下久志のウィーノ。そこの礁湖にマンガラの大きなのがあがった。広い礁湖だから舟で行った人は青酸カリで酔った魚をモリで突いたりして獲った。ザルですくおうとするが逃げるのが多かった。

（３）魚の取り合い

うんから、１斤、２斤べぬマンガラぬふてー石ぬあーむ。ちゃーかーたスィンぬあんとあしが。うんとぬ　ネィクイ　ウィーノぬうきぬ　かん方ぬ方あしがよ。ヰノぬ方あしがよっ。くもりなーとぅんとーあしが、石かちしだんとぅ。松本おじさん、

「うりや、なんがどぅ　うっくち　ちゃしが、だーかち行じゃんが。だーかち行じゃんが」ち（笑いながら）。トゥギャやむっち　しーちゃんとぅ。うりやスィンかちしだしが、っわっきゃスィンかち　しだんちあてぃあむなてぃやっ。アキさんえっ、ありとぅ、あり、ヨシヒロあたろち思ゆしが。ありが　ヨシヒロが　ぎにゃーあり　７ちか、１年生べーあたんがら　あてぃねしが。おじさんが行じ。いきゃなーげ　なーてぃぬまりえっ、うまからマンガラ、くんでや、とぅてぃ。ティルないーてぃ。しか、またむーる　あちめぃりあんせね。

「へぇく　かいり」ち、ありや、ふぇーあし。かん方ぬ　うきなげーり渡てぃ、ありやかいたしがえっ。ちょーかっきべーしゅるマンガラあたんで。

（意訳）瀬の上から獲っていた人に追われた大きな魚（マンガラ・和名は不詳）が来て石の下に潜った。松本さんは「自分が見つけ追っかけて来たがどこに行ったか」。知っていたが黙っていた。行った後、獲って小さい子にあげ、帰らせた。大きな魚は一箇所に集めていたからだ。

（4）場所で違う

うがしか、舟ぃなーから　あっきゅんちゅや、港なー行じま、よろよろ　しーあっきゅてぃか　トゥギャし　ちきあんせね。あんだかち　きゅーんちか、っわっきゃにがり、クサビぐぁとかアイヌクヮぐぁとか、うっしゅんマーッイュぐぁぬ　かっしゅむぐぁどぅ　とぅらりゅんぬ。あんだかちがり　くーんせね。っわっきゃな　みんちりさどぅ　とぅたしが。

うんから、向こうぬ　あがん流りるるあまな　をぅたんちゅんきゃや、アイヌクヮんきゃシレーんきゃぬ流れぃてぃしっち、　やーと　とぅたんち言ちゅたしが。っわっきゃや、くん方ぬ　うきぬ方なくまどぅ　をぅんかだあてぃねんち　さーしがえっ。をぅたしがえっ。うにんきゃま　とぅりどぅく　あんせね。Mめぃが　むんなてぃやっ。

（意訳）下久志の大きな礁湖（一部は外海とつながっている）に青酸カリを流した。魚の群れが入っていたからだ。大きいので場所によって漁に恵まれるのが違った。嫗などは良いと思った場所で獲れなかったが、他の人で恵まれた人もいたようだ。

（5）分配（タマシウチ）

うにん　とぅてぃ　浜なてぃ。ウーッイュや　とぅーてぃ。舟ぃ　うーむん　さんちゅきゃ　わーち　宴会、かみ。かみあたんとぅ、っわっきゃや、あちめぃりだましッイュや　とらむなてぃ。ウーッイュや　とぅらむなてぃ。っわっむんぐぁんきゃがり　はんくらしだまし　ねーむなてぃ　はんくらさだたしがえっ。うがしちょーかっしゅんマンガラぬ　うりうりうり・・。

（意訳）大き目の魚を獲った人達は浜でこぼして分け合った。また、炊いて宴会もしていた。多分、ここの礁湖に青酸カリを流そうとした人々を見ての話だろう。一般の人々が獲る分は見逃したろう。今であれば法律違反問題だが、アメリカ軍占領下の出来事で誰が中心かも分からない。平等に分け合うことを「タマシウチ」という。

（6）舟も入る礁湖

あまや、ちょーヰノナ、あーむん　あんせね。あうあう　しゅんせえっ。舟ぃしどぅ　あっきゅんせね。うがしなてぃ　うがんマンガラぬあがてぃ。うま行じ　いーたんとぅ。マンガラぬ　あんだかち　ちや、ひんぎり　ひんぎり　さーしが。っわっきゃにがり　セし　しくゆんちゃんてぃしきゃらん、きっさ　ひんぎりなてぃ。トゥギャむっちゅん　ちゅや、トゥギャしとぅり、とぅり　しーえっ。

――ふぇーかヰノナーだれんや。

ゐん、あがはんべしゅむなてぃ　ドラムカン3本べー入ーてぃ　あらんかや。Mめぃが、うり　入ーてぃぬのり、フーガネィクぬしゃーぬミクイノや、うま行じいーたんはず。うんから（次の方の最後に続く）・・。

（意訳）下久志のところの礁湖といっても沖と繋がっている。舟が出入りし、珊瑚礁で囲まれていない。そこに青酸カリを流したのだ。

（7）漁慰み2（ギューナクサミ2）

Mめぃたが　ドラム缶むっちちえっ、わきゃフーガネィクぬさーぬ　ミクイノな入ーてぃ。とーうん行じ　入ーるとぅやえっ。うにん　いきゃしがやっちかえっ、しゅぬ　からーからーしちか　やーととぅらましぬ　むん。はんぱどぅりし

とぅーてぃ。

うんから、浜かちッイューとぅたむんむーる　あちめぃてぃえっ。ウーッイュやウーッイュ、ックヮッイュやクヮッイュじーとぅ　あちめぃてぃ。ちゅり　いきゃさじち　きんめ　けーてぃえっ。むーるうむあたしがよ。

っわっきゃEちゃんがよ、Aはんげぃとり。Aはんぎぃてぃ　ッイュじゃら　あむさんとぅえっ。うんか名田ぬあーまがえっ、オボロンクな　入ーてぃ、

「へぇく　ぃやっむんや　はんくさんごへぇく　はんげぃてぃ行けぃ」ち言ち、っわっきゃ　ありに　はんぎぃらち、ありうんなげーり　かいらちゃんちよ（笑い）。「ぃやっ　へぇく　オボロンクぬむんや、はんくらしご　いらんきぃ」。とぅたむんや、むーる浜かち　はんくち　うーむんやうーむん　分配しゅーむん。何十人ち言ゅんちゅに　配分あんせね。とぅたむんや。青酸カリや、ありが　ただなてぃやっ。Mめぃが闇商売しゅーりなてぃ。ドラムカンてぃち　むっち　ち。

（意訳）２度目の漁慰みは諸田の下の礁湖であった。獲った後は浜で分配し、料理しても食べた。その時も分配のため獲った魚は籠からこぼすが、子どもに「小さい籠に入った魚はこぼさないでよいから帰れ」と。

（８）後の話

うんから　わちゃめぃたんちゅ－ゆりま、うんか　まりから　いきゃしがやっちか、シュダちゅんきゃネィバリとかおーじらんしこ。トゥクヌックヮとか　とぅたんち言ゅーたんちよ。しゅぬ満ちゃがりどぅとぅりなてぃえっ。いじてぃ　きーあんせね。

ギューナクサミや、Mめぃや、うっしゅてぃま　さんちゅあしが。闇商売しもーけぃてぃ。

（意訳）潮が満ち始めると魚が酔っ払いながら出てきた。他の人々が多く獲ったという。M兄など漁慰みを村中の人にさせたがね。

（９）楽しませた人々

もーきぃたんむんぬ、後ぅ　しまいには、赤字なてぃ。調子がいきゃんがにしなたんとぅ、あむし　借金だけえっ。ウッコんきゃ、Hたウッコんきゃサタぬかわりとりむんあらや。トーバルんきゃ。うんがまりがり　しーならんごなてぃえっ。

うがしか、わきゃサタんきゃえっ、シュダぬ元山さんえっ、

「うまぬヤドゥリかち　入ーれ」ち言ちえっ。うがん　っわっきゃ　あーじゃたタルシキャシな　むっち行じえっ。ぬがら、うま行じ　入ーたん　くとぅんきゃまあんだ。通ちゃんくとぅんきゃま　あんだ。うにん金ぃぐぁ　いきゃさ　とぅたんがら。

うりが、うんなり中止なてぃ　行きならんごなたん訳ぃ。行きならんごなたんとぅきゃ、ぷーんとぅ　かぶりあんせね。かぶたんとぅきゃ、しか、金ぃま　入ーりならんせね。うやんきゃぬ　むんま　こーたんてぃ金ぃが　入ーりならむなてぃ　ウッコんきゃ　むーる　取ぅらってぃよ。

（意訳）闇商売で儲け、シマの人々を楽しませた商売人も時の流れの中で渡航が自由にならなかったり、資金繰りが悪かったりして借金が増え、持っていた土地なども人手に渡っていった。

沖縄との自由な行き来ができなくなったからね。自分達が小作していた畑で出来た砂糖樽を別の人の家に届けたこともある。

10、空襲前後の製糖

（１）キビ運び（ヲゥギハンギィリ）

ふーん　うにんきゃぬサタしーちか。カンニバルからナオキチ（町田直吉翁・故人）ぼうが　うがん　じーとぅ　ヲゥギはんぎぃ。ヲゥギはんぎぃてぃ　ナオキチ

ぼうが　むんなてぃ　フクガチ（富沢福勝翁、叔父・故人）にゃがサタ炊きあたんちよ。サタ炊きあたんとぅきゃ、っわっーどんちゅらし。ちぃや、たーり、みちゃりま　たんでぃ　うがん　かよち。うんが　なーちゃや、っわっ、どんちゅりし　はんげぃり　あたしが。はんげぃてぃ　さんとんきゃ。うんから、フクガチにゃが、

「っいっやま　どぅんちゅら　うがっさ難儀し。鉄カブト　みーや（砂糖）とぅり」ち。っわんに　うがし言ちあたんちよ。言ちあたんとぅきゃ。しか、爺にうがし言ちゃんとぅ、

「えっ、っなま。ねーだてぃかあしが、まり、ヲゥギあんせね。まりか、また、うにん　ぃやっんに　くーるさ」ち言ち。ふーぅ　っわっきゃ爺―た　かたかーちゅ　あてぃだ。

（意訳）甘蔗運びはきつい仕事だった。難儀な様子を見て、叔父が「それだけ難儀している。鉄兜一杯は砂糖をもらえ」と言う。父に話したら「甘蔗がまだあるから後の製糖でもらえば良い」と言う。父は固い人だった。

（2）空襲の始まりと製糖

後ぅ　しまいにや、まりぬヲゥギやサタしーならんごえっ。うーんなり　ヲゥギや、かざじ　イーシュマンにゃが　さんほうヨシアキ（弟・藤田喜秋）たが、こーたんせ。うんなクーマンドー建てぃてぃ　あたんとぅ。うんから、ヲゥギはんぎぃてぃ　天にし　ちでぃ。サタさーるんち　さんとぅ。しゃんとぅ、空襲ぬ　しっち、サタしーならんご　なてぃあね。かいってぃ　ゆーぅ激しくなてぃえっ。激しくなたんとぅ。うん　しまいにや、うーむん　にちか、野砲ち言ち　爆弾はんとぅしゅんち言ゅん噂ぬあてぃえっ。なー、おとろくなてぃ。ヲゥギや、

「サタしーどっころあらんち言ち、クーマンとーしっ」ち。シキボウ、長―しゅんせね。にーちか　うがん爆弾はんとぅしゅんち。うがし噂ぬ　あたんとぅ。うがんはんぎぃたんヲゥギうんなり　かりらちだ。うがし、うんから　ナオキチぼうが　むんかち　はんぎぃてぃ行じぬまり、残りぬヲゥギや、なーしか、さーち思ったんてぃぬ　ゆる　くぁーしきらんご　さんとぅ。

後ぅや、昔、うり　栄田あらんご、なーぬ福留Mめぃが　とぅじぬうやんきゃあーてぃあらんかやーち思ゆしが。うりたが、「ゆるゆる。とぅりうぇしゅん」ち言ちえっ、ゆるゆる、ヤーにんじゅし　かさじむっち行じ。シュダワセィや、ゆるゆるサタさんちよ。うにんサタぐぁ　いきゃさむっちちゃんがら　っわっや、わかりやさしがやっ。

（意訳）後になると、空襲が始まり、昼の製糖は出来なくなった。甘蔗を積んであったが、甘蔗絞場の牛の引く棒（シキボウ）が砲身に見え、野砲として空襲の対象になる危険性があり爆弾を落とされると言われた。怖くて「製糖どころでない」としなかった。後の畑に残った甘蔗は、諸田の人が「製糖して分けよう」と言って、製糖させた。いくら持ってきたか知らない。諸田、徳和瀬の人々は夜に製糖したそうだ。

（3）茶受け持参

うがし　うにん　ぬがちか、うんからサトウ大根つくるむ　あたんちよ。サトウ大根とぅトー豆ィわーち、茶んしゅきちいち、うまぬ　ヲゥギばてぃかち、サタしゅんとかち　むっち行きあたんちよ。っわっ、ヤーな　をぅーむんなてぃやっ。あただんし　よーり考げたんとぅえっ、なぬTちゃんが、あまが、うやんきゃ　あらんかやーち思ゆしがえっ。爺ちゃんた婆ちゃんたをぅてぃ、っあまじゃら　をぅたんちよ。あじゃや、炊きあたんちよ。炊きなてぃ。うんか　っわんが　よーり　がんげぇりじゃわ。あねー、あのー佐田ち言ゅんちゅ

あたんちよ、うりた。ありた　あらんかいーヲゥギ　はんげぃてぃ　サタ　とぅりうぇ　さーしが。ありたが　うや方きゃあらんかやち　また　うっかんな　かんげたしがえっ。
（意訳）製糖して分けるのをした人々は誰だったかなあと思う。祖父母など家族で製糖していた。

注

「つくりうふぇ」（作って分け合う。正確に表記されていない）と言うが、製糖して砂糖を分け合う。割合は不明。

（4）爺（父）の欲

ふーっ、爺ぬ欲ちか。うにんぬ金ぃ4000円がらあたんちよ。Mめぃに。4000円がらちゅっけりや　とぅたんちよ。400斤がら２００斤がら売てぃ　しゃんとぅやっ。かび束　かっさんべ　むっちちゃん訳ぃあらや。っわっーましか、100円札　かし計算し－あんせね。うり　ゆんがまらあん。後ぅ、
「いきゃさどぅ　あん」ち言ち。
「くり　4000円あるびきあしが、あんどぬがいー」ち。3800円があら　いきゃさがら計算しーあたんとぅ。うんか　またしゅんち　さんとぅ。わんに　なりあてぃくーてぃか　あーしが、ゆんがまらーん。
「うがしか、200円　なーか　とぅりまいあし」ち言ちゅてぃ。郵便局ぬうんとなをぅりなてぃやっ。春山正一めぃが、をぅたんとぅ。計算しめぃたんとぅ、丁度4000円あたんち　うね。
「もうけぃたが」ち、爺がわんに言ちゃんちよ。ちょう　きぬに　しゅーしが。うっしゅてぃ　っわっきゃに難儀しめぃたんてぃ、サタぐぁ一斤　くーらむ　あたしが。
――空襲どぅきぬ後ぅだれんじゃやっ。

空襲どぅきぬ　後ぅ。B券なーてぃげんか。闇時代ぬくとぅあね。うがし、残りぬサタ、かさじ、サタしーうふぇ。
――空襲ぬきゅーんち言ち　さーだたんヲゥギだれんや。

うにんよ、うがさんげーぬ　はてなたんとぅきゃ。なりや、くんでや、ナオキチぼーがむんかち　むっち行じ。サタさんごしー。Mめぃに　売たんとぅ。うんが　ちぎしゅんち　さんとぅ。空襲ぬ激しくなーてぃ、グラマンぬどーんど　きーちけたんとぅあね。シュダワセィちゅんきゃ、おとろあうんなーなてぃ　サタしゅーむんあたしが。
――Mめぃや、戦争前からサタ商売しゅーたん訳ぃだれんや。

終戦後よ。
――終戦後がりグラマンぬちー、爆弾はんとぅしゅむだれんかや。
（意訳）父は娘（キヨ嫗）を難儀させたのに、現金をつかむと娘には砂糖代１斤分もくれなかった。終戦後の闇商売の時代だ。戦前の4000円は大金である。戦後のB円時代であろう。昭和20年の終戦前から後でキヨ嫗の主人栄良氏が戦争から帰る前であろう。

11、空襲時期の暮し

（1）アメリカ機の編隊

戦争（徳之島での空襲時期）はじまらん前、昭和18、19年あてぃあし。
――富山丸ぬ沈没しーぬ　まりだれんど。

19年なてぃやっ。うんから　まり　ぼちぼち　てぃんとがなしみー。うりが沈没。富山丸ぬ沈没しーぬまり。うんからいきゃしがやちか、400機ぬ飛行機ぬ。てぃんとーがなしぬ。ガラぐぁにし　かしにゃってぃえっ。ちょうクーマンドジキあんべぐぁ。てーんとがなしな　ちょー両方な輪つくてぃ。ターぬ輪つくるしま　てぃーちむん。てんとがなしな　をぅーむん　じんしょとぅ、うーむとぅ　をぅーめぃちゃんちよ。ちょう　たーくみ　うぇーてぃ。くまな　クーマンドジキにしかえっ、また　片

方なクーマンドジキにし　まーん丸しゅーむ　あたんちよ。しか、てぃーちぬ　まん丸しゅむんや、ちりちりなーてぃ　ウーシマぬ方かち行じゃんちよ、うね。うんかてぃーちぬむんや、うりが　しゃーかちあむしちけたんとぅ、うりてぃ　ぬっちが視察しゅんがにし　なてぃあね。ほーぅ、うんから、初めぃや、いーかげんぬ　たーかとんから　しゅーたしが。うんから、うがししま　くまや、ぬーぬ設備が　ねーむなてぃ。設備や　ぬーんまねんちにち。うんから低空しーちけぇてぃやっ。

うがし　じ－とぅ　うんから、じーとぅ空襲ぬ、四機じち　しーきゅたんちよ。10時べーあり　しーちか、ひるぬ２時べありしーちかやっ。

（意訳）アメリカ空軍が編隊を組んでくる様子である。最初は攻撃を恐れてか、かなり高空から偵察のようにしていたが、攻撃がないと知ると低空してきた。４機編隊で10時頃と14時頃に来襲した。

（２）警防団員の暴力

うんから、富山丸ぬさってぃぬ　まりあたしが。Ｆめぃが。区長さんが警防団長あんせえっ。うがしか　ありたや　ナガクウシュジなてぃ警戒しゅーたんせえっ。しゅーたんとぅきゃら。うんから　シキシル（泉碩広氏）にゃが、むらぬ区長さんあたんちよ。富山丸ぬ　さったんとぅきゃがら、うべぃらんごなてぃ　シキシルにゃぶーとぅ　竹槍し　まがり　しねぃ　ちっきぐだちえっ、ゐしてぃ　あたんせね。Ｆめぃが、へぇく　むんが言いならむなてぃ。

（意訳）警戒場所で警戒していた人が、警防団長していた区長さんを、富山丸が攻撃されたからか、何かで混乱してだろう竹槍で膝を打ちすえる暴力をしてあった。

（３）富山丸撃沈と攻撃の噂

うんから、まりから　富山丸ぬさったんとぅきゃがら、タムンあちめぃりぬやっ、ぬっせぬやっち　あむしが行けち言ち、あまなてぃ　むーる　アキチュぬ舟なむっちや　しゅっきゃげぃてぃ　ちゃんち言ゅんせえっ。うがしさんとぅ、

「空襲ぬきーなてぃ　ターハチガナシかちぬぶり」ち言ゃってぃあね。時間が遅くなてぃ行きならんごあね。っわっーや、むんはんげぃてぃか。あんや、栄（二女）ちゃんはんげぃてぃ。ねーや（長女房子さん）・・。

「うりた組や、むーるターンハチガナシかち行じえっ。まに　おーやむなてぃ」。

「とーぅ、うがしか　あむなてぃ」ち。マシタメィ（前田政為氏、現房子の夫）たが山ぬあんせえっ。コーチなモトゥウ爺、うんからメィーあかた。何町歩ちあんちゅあたんちよ。ありた　うんな避難場所ちッヤつくてぃ　あたんちよ。

「と、とっ、あがん行きゃらむなてぃ　うりたま　なっ、わーきゃとぅ　うむし」。

メィーあかとぅ、名田ぬあーまがえっ、

「うりた、なっ、あがん行きならんだ。なーきゃとんかち　しーく」ち。っわっきゃうまま行じ　１週間べ　をぅたんとぅきゃ。

（意訳）富山丸が撃沈され、薪の供出などがあった。それから、アメリカの攻撃の噂があり、「ターバチガナシ（ガナシは尊称）に登れ」と言われた。しかし、行けなかった。乳飲み子をかかえたり、食糧を持ったりで間に合わなかった。途中の避難小屋にいた前田姓の人が自分たちの所へ来るように誘い１週間くらいそこで世話になっていた。

（４）避難小屋

うんか　っわっ爺がえっ、

「うがし　ちゅぬヤな　うっさんげ　をぅりならん」ち。マチサジぬトシオ（井上利應氏・故人）にゃが　うんとぐぁえっ。うやっくぁし　木ぃ切ちちや、インヌブリ、

みーち　つくてぃ。てぃーちや、牛んヤドゥリ、てぃーちや、ねぃんびゅんとー。てぃーちや、いきゃしがやっちか、むんしーどん。造たんしじあらや。うがしか、うんから、っわっや、ハリ抜ちから、爺やくんじ。インヌブリなたんとぅきゃ。じーとぅ、葺ちやいきいきしー。っわきゃハリんきゃ　ぬかちか大将だ。うがし　インヌブリつくてぃ。

（意訳）爺（父）が、「人の家に長くおれない」とインヌブリ（直訳は犬登り）と呼ぶ小屋を親子で3つも作った。片屋根の小屋という。一つは牛小屋、二つ目は寝るところ、三つ目は炊事場だった。

（5）避難小屋で

空襲ぬきーなたんとぅ。うんから　たんこなフジエイめぃが、をぅんせね、はてぬあんせ、ありた田ぬ。うんから　っわっきゃがハンシン煮―、っまちバーバーめーちやんとぅ、

「ふーぅ、ゆる空襲ぬきーあしが、っまちめーち」ち。向こうから　あびぃらりっちよ。うんからヤドゥくーてぃ。ゆるや、あーがり　洩れり　あんせね。うがしにさんとぅ、うんか、やっとぅ、木ぃんシバし。やっとぅ、ぎりーぎり　トージキ（注）むっち　しっち　じょぐち　さーじ、うがし　ハンシン煮ちゃり　しゅーてぃだ。

うがしまよ、インヌブリ　かししか、しにぃ　ぬばちか。さーや　じんしょなてぃ。っわっきゃテンマクしちどぅ　寝ぃんびゅたしが。

（意訳）芋を煮るために火を燃やしたら向かいに避難していた人から火が見えたら空襲されると怒鳴られた。柴やトージキ（萱の一種）などで火がもれないようにした。

注

「トージキ」（直訳唐ススキ？）ジキはススキ．ススキよりも茎が太く大きく成長する。萱屋根ふきの材料。本土では見かけない。

（6）小屋とハブ（インヌブリとマジムン）

Mちゃん、うんなてぃマジムンにくぁってぃえっ。しに　ぬびぃるんち　くぁってぃ。アジャマ（浅間在駐屯）ぬ軍医しょーてぃちゅてぃ、Fた養生しだ。

っわっきゃよ、うがし、うり聞ちゃんとぅ、しに　ぬばち。しか、まぐでぃべーま寝ぃんび　ならんせね。やっぱり　うりま神様。うんなてぃ　ちょう　くぁっかーるよっ、タンコマキぐぁ、あんが　にーち。あーとぅき寝ぃんでぃ　うーてぃ　にちよ。うーむんぐぁ　てぃち　くっち　あたしがえっ。あら、うんなてぃや　ぬーんまにゃんご、ニシマバルかち　うちてぃよ。

（意訳）別の小屋でハブに咬まれ、浅間（現天城町）から軍医を連れてきて治療させた。小屋が小さく、足を伸ばして寝ると地面に出る。だからといって、足を曲げてばかり寝れない。ハブに咬まれるのも運命（ィヤージ）と関係があるだろう。

（7）避難場所の移動

ニシマバルかち、フーナベィはんげぃ、はんげぃ。ティルはんげぃ　はんげぃ。また、道具しょどくはんげぃてぃ。くまなてぃや、あま行じ通てぃ　むんちくり（しー）ならんせね、カンニバル。さーらむなてい、

「とっ、くんなてぃや　さーらむなてぃ」ち、ニシマバル行じ、また　インヌブリたーちつくてぃあね。インヌブリつくりべーどぅしーだ、っわっきゃ、あじゃとぅっわっうやっくぁ。

（意訳）山にいたのでは農作業が出来ない。集落に1回下りて、また上って行かなければならないからだ。それで畑のあるニシマバルに疎開小屋を2つ親子で作り移った。

井之川での疎開の具体的様子が分かる。もし米軍が上陸すればと想像するとゾッとする。あまりにも避難場所は地形も複雑で

ない。

（8）ハブを殺す

うまなてぃ　タクマキ（注）ぐぁ。あんが、あーとぅき　ふぇーあー、

「寝ぃんで　うーたんとぅ、うたん」ち言ちえっ、くっち　あたしが。うりうり　あまーんくま　にちゃんてぃぬ、かっしゅむんきゃ　なかなか神様なてぃ　うむ　さむだ。

（意訳）ニシマバルに避難小屋を変えた時に母（なべ志や）が子ハブを朝方見つけて殺した。

注

タクマキは小さなハブの呼称。煙草くらいの大きさを言うかも知れない。毒は大小にかかわらず同じだと伝わる。

（9）ハブに咬まれた人

ありま　くぁーるあぎぃぬちゅどぅくーゆんぬ。うんから　ナオモリにゃがあーまがえっ。道具しょどく　むーる　っわっきゃ　イフぬウクトゥシ爺がヤドゥリな入ーてぃあたんせね。畳じゃら　あらゆる　どーぐ　むーる　うがん　むっち行じあたんとぅ。うんか、畳ぬ　あいちがら、手ぃちっくでぃやっ。っわっきゃ栄ちゃんが（現・永見栄子）が　いぬなご　あたしが。手ぃーちっくだんとぅきゃ、っわっ、ヲゥギばてなーな　おしめふし　しゅーたんちよ。こー行じあろてぃ　トゥミアキあーま（藤富秋氏・故人の母）たが、わきゃニシマバルしゃーや。トゥミアキあじゃ（富秋氏の父）、にゃー（キヨ嫗の叔父）たが　はてあたんちよ。うんヲゥギばてぬ　なー行じ　おしめ　ふし。なー行じ　しゅーたんとぅ、

「はーいえっ」ち言ち、ちょう　かっしゅんと　くぁってえっ。Sめぃが　あまよ。うがし手ぃーみんじぃ　ゆーえし　きらだたし。ニシマバルなてぃ　もーりさんちよ。うんちゅや、いきゃしさんがちか。うっさッイャージぬちゅされ。むんぬなーかちなっ、ヤドゥリぬなーかち　いるいる茶櫃とぅか、畳じゃら　いるいる　うちあーむ。あいかち、かし　手ぃーちっくだんとぅやっ。あいな　うたんしじあしえっ。っわっ　うんちゅぬ手ぃ　っわっきゃはてから　うがし行きあたんちよ。ぶちなげーりぐぁやっ。にゃが、ぶちから　うんなげーりぐぁ行きあたしが。っわっ栄ちゃんが、うんから　ねー（現・前田房子）が　ゆーち　ありなてゃ。いちちがら　ありなたんとぅ。はて　せとぅなりし、マツエさんがゐんがぬくぁ　なまいや、ぬっちがいー、うりたが　むーる　かなーし　てぃーちしゅーたしが。っわっきゃーわれんありあしえっ。二七～二八べーなりなたんとぅきゃやっ。行きまさーり　にーがま行ききらだたしが。あんた爺たや　とぅんべ　しが行じゃしが。にがま行きゃんご　さしが。うりうり　うがしゅてぃし。

（意訳）疎開中に小屋に道具なども疎開させていた人が、何かの用事で小屋の道具の中に手を差し入れたら、ハブに手を咬まれた。今のようにハブ毒血清の注射なども出来なかったのでしょう。一晩もたず他界したという。これも表に現われない戦争犠牲のひとつでしょう。

（10）戦争中の療法

ふーぅん　うんから　ねーが　いきゃしがやっちか。からだな　のーな　ぶちゃぶちゃし、

「ちーそぬ　わさーあてぃかどぅ　うがししゅーむん　あしが。ぬんか中毒んきゃしーあらめ」。

「ほーぅ、くりや　ぬーがら　わからん」ち。あげれぬ　にゃーに　にしたんとぅきゃ。

「ぬんかぬ　きじから　ばい菌ぬ　ふぇっちゃんがら　あてぃねん」ち言ちゃんとぅきゃら。うんから、うんが前　ホーシマン

バリぬ　あじゃ　むんごしゃ、むぬじきあたんせえっ。うんちゅや　ヤーな　をぅらり、ホーシマンバリちゅや、むーる　イビガナシななてぃえっ。うんなてぃ　竹デークしゅーたんとぅ。うがん　そーてぃ行じ　にしたんとぅ。うんちゅや、わんにむんま　っいやーむんなてぃえっ。たよりま　ならり、うーむんがら　あてぃねんち。ありそーてぃ。くんでや、宝（姓）ぬ、宝めぃ（宝兄）たが　あーまたが、あんぐぁがえっ、部落かちシキぬッイュむっちきゅーむなてぃやっ、

「シキヌッイュ　みーちよ、かませ」ち。うや方や、宝ぬおや方とぅ　っわっきゃお父さん（夫）たうや方とぅ　ハロジ（注）あんせね。　うんか　あげれぬにゃーににしたんとぅ、

「ほーぅ、くりやばい菌がら　あてぃねんち。あむし　あむせ」ち。火傷しゅる　ぬっちがやっ。きじんきゃな　ちきるたんせ。コウセン（鉱泉）あらんごとぅに。うにんきゃや、コーセンま　ねむなてぃ。きじなちきるたる　ぬっちがいー。うり「きじなちきぃていから　のーるん」ち言ち、うりちきたんしじあらや。うりが　ぶら　ふちあばりりちけぃたんとぅ。うんから、

「うがし、うがし　さんとぅ　あばれりちけたん」ち言ちゃんとぅ。しょーてぃ行じゃんとぅ、ユーシにゃや　いきゃしがち言ちか、

「竹デクしゅんとかち　うっしゅんきじぬあんちゅんきゃや　しょーてぃ行きゃむんち。ばい菌が　ゆー、うべぃるむ」ち。うがし言ち。うんか　まりから　しょーてぃ行じゃんとぅ。

「ふーぅ、くりやえっ、うっしゅん　竹デェクしゅんとかち　うっしゅん　きじぃぬあんちゅや　しょーてぃ行きゃむんち。ばい菌が　ゆー、うべぃるむん」ち。まりから　しょーてぃ行じ　にしたんとぅ、

「ふーっ、きじ口ぬあんちゅんきゃ、そーてぃ　くむだ」ち、うがし言ち。始めぃや、いんだちかち、むんま言ゃーだたんちよ。にーち　ゆーに　しーくーらんでえっち言ち　道ぬぶーりぐぁ　かいてぃ　ちゃんちよ。

　うりうり　本当まあーしがよ、うんかまりから　うまぬヤかち行じゃんとぅきゃやっ、「きじくじらぬ　あんちゅやっ、竹デクぬとんきゃかち　行きゃむ。うべぃるむち。ゆう　うべぃるむなてぃ」。

ちぶさーち。「かしかし」ちえっ。ぬっちあたんがえー。青酸カリあらんご。昔やうり　こーとぅてぃ　きじぬ　いじてぃか。きじな　ちきるむ　あたんちよ。っわっきゃヤーんきゃま　うり　こーとぅてぃあじゃた　ちきるたしがえっ。むーる名まい　わっしてぃ　うべぃらんごなてぃあね。鉱泉まあら、うにんがり　鉱泉ま流行てぃま　うらだたんきぃ。

――みじぃだれんど、あんば　だれんど。みじ。うがしさんとぅきゃ、うり　あまんくまぐぁな　ちきたんしじあらや。かいってぃ　ぶら　ふきゅっとぅや。火傷しあね、じーとぅ　しるがたんしじ　あらや。「ふーん　ちまらんぎぃ」ち。うにん　チョウヨシにゃに　にしたんしじあらや。チョウヨシにゃが、チブチブぐぁな　ばい菌ぬ　うむさんがにし。

いきゃなーげさんとぅ　かりたしがえっ。薬ち言ゅーむんや　ねーりやっ。はーっ、あわれなむんあてぃよ。

――房子ねーが　いくちぬ　とぅきだれんが。

　いちち。

――ありや、何年っまーりだれんが、15年。

　15年　っまーりなてぃや。栄ちゃんや、昭和19年ぬ１月　っまーれぃ　なてぃや。

――いぬなご　あてぃか、昭和20年ぬ　くとぅだれんじゃや。

20年べあたや。かいって　火傷しめぃてぃ。ううりうり、ううりに「いちゃーん」ち泣かったとぅ。医者ち言ゅーむんやをぅらり。

――チョウヨシにゃ。

チョウヨシにゃ。恵シギにゃが　あーじゃ。チョウヨシにゃち言ゅんちゅぬをぅたんせ。むんごしゃちゅ　あたんせ。灸さーりやっ。

はー、なっ　っわっきゃま昔ちゅよ。うっしゅんちゅ　むーる　あてぃあむなたんとぅ。うがし、うんかチョウヨシにゃがうやんきゃ、くんでや、っわっきゃエーロ（夫・栄良）にゃが　うやほうんきゃ、いきゃしがらし　キョウーデなとぅんあんべちよ。なーま、宝ぬ貞彦たハロジち言ゅんせえっ。ぬんかにしハロジなとぅむなてぃ。チョウヨシにゃが　めー行じ　にしたんとぅ、

「ふーぅ、くりや、やっ、うーむんし　かいったやっ、火傷しめぃてぃ。くぁーまるきり　でんな　つくり病しゅっきじゃちあん」ち言ゃったむ　きぬに　しゅーしがえっ。しか、にゃが、青酸カリあらんご。ぬっち　あたんがいー（ホウサンあれらんぎぃや）。ホウサンがら、ぬーがあら　水ぃぐすり　あたんちよ。うりや、こーゆむあたしが。うり　ちきてぃか　いちゃーん、いちゃーん　なーんぐぁんきゃ、きじぐぁぬ　あんとんきゃな　ちきてぃか　いちゃーん　ちぢからむん　あたんちよ。うりが、普通ぬからだな　ぎりぎりな点々ち、ワラシブぐぁぬなー軸ぐぁし　ちきぃてぃ点々ぐぁどぅ　さーしが　うりが　ちゅーあむなてぃ、うね。火傷し　ぶらふちあね。ちょう　うんと　うげぇへんべ　ぶらふち。さんとーむーる、

「ほーぅ、ちまらんぎぃ」ち。ううりしチョウヨシにゃに　そーてぃ行じ。

（意訳）昭和15年生の子に突然、ブツブツが出た。集落のいろいろな人に見せ、相談した。竹細工をしていた人はものも言わなかった。別の人に見せた。後で竹細工などしている所ではかえって傷を元気づけると言われた。水薬をつけたら、かえって大きくなった。「かえって病を引き出してある」と言われた。娘は痛いとなくし困った。かなりたったらかれて治った。医者もいない、薬もない時代であわれなものだった。

注

ハロジは、奄美の社会を見るときのキーワードになっていることを先学の奄美調査分析を紹介している（「文化人類学から見た奄美」桑原季雄教授奄美サテライト教室講義資料５頁2007年）。

12、おわりに

徳之島の民俗文化には記録に残らないことが多いように思う。

■しまゆむた

奄美の古い宝物との付き合い方愚考

朝沼　榎（医療法人碧山会理事長）

奄美が世界自然遺産登録の候補地に選ばれて数年が経過しました。行政が中心になって登録に向けた準備がすすむにつれて、地元の人びとの間にも少しずつ期待や不安が広がりつつあります。シマンチュウの暮しに親しんできた住人として、開発一辺倒でもなく保護至上主義でもない貴重生物種との付き合い方について、常日頃抱いている私見を述べてみたいと思います。私の思いを一言でいえば、開発も保護も一辺倒になりすぎると、端にいる住人から見て首をかしげたくなるやり方に落ち込んでしまいがちです。ですから、ある意味で“いい加減さ”というか、長い期間かけ生活の中でつちかわれたバランス感覚が大切ではないかということです。

３つの古い宝物を具体的な事例に取りあげますが、一番目はアマミノクロウサギです。このウサギは絶滅危惧種で特別天然記念物となっています。大正10年に国の天然記念物に指定され、昭和38年に特別天然記念物に指定されました。大和村にある環境省の奄美野生生物保護センターは、アマミノクロウサギを守る目的で設立され、現在も、精力的に活動しています。主な仕事の１つは移入された天敵のマングースの根絶です。私たちが聞いている説によれば、今から２億年前、地球は恐竜時代のはじまりで、その頃に哺乳類が出現しています。その頃、各種の生物は全世界へひろがり、各地域の固有種が出現しています。160万年から１万年前の更新世のころ、琉球列島は海水面のレベルの高低で、大陸と繋がったり離れたりしていたといわれています。アマミノクロウサギはその頃を起源とする奄美大島特有の固有種であることが、遺伝子レベルで証明されているそうです。

その頃から生存している固有種には植物も多数あり、また、毒蛇の代表格であるハブも、同じように生き延びてきた仲間の１つですが、一応国と県は根絶を目指しております。アマミノクロウサギやハブの祖先は同時期に発生したものではなく、アジア方面から地球全体へ広がっていったとのことです。奄美では160万年から約１万年前ころに帰化し共生し、海面上昇でもって周囲からの孤立により固有種となったとの説を聞いています。周囲より孤立化している160万年から１万年前の期間も、ダーウィンの進化論に従えば自然淘汰による適応進化がすすんだ事になります。

地球の長い歴史の中では、移入したいきものが以前より生存している生物種を根絶し進化したケースも、移入後に帰化し共生し進化している事例も多数あります。平成元年に絶滅危惧種に指定された琉球アユも、アマミノクロウサギやハブと同時代のもので、奄美の固有種です。琉球アユについても遺伝学的な証明がなされているそうです。中国大陸と日本本土のアユの遺伝子の違いは１パーセントに過ぎないのに対し、同様な尺度をもちいると、本土のアユと琉球アユはその100倍以上も違いがあるそうです。

さて、地球規模でみるとダーウィンの進化論による自然淘汰が当たりまえかもしれ

ませんが、地域的な固有種は、その遺伝子を160万年の長い間守ってきた宝物だと思います。目下は、私たち人間の開発行為により地域的な固有種の絶滅が危惧されるとして、問題になっています。けれども、その対応はどの固有種も同じというわけではありません。アマミノクロウサギは、特別天然記念物となり、奄美野生生物保護センターがつくられ、移入されたマングースの根絶をめざすなどの積極的な保護活動の対象となっています。

ハブについては人間活動に害を及ぼしているので、国や県は根絶を目指しています。その一方で、これはまずいという考え方にたって、遺伝子を操作する方法により無毒化を研究している方々もおります。このケースの場合、ハブは本来の固有種ではなく、新しく固有種を創造することとなります。それでも、私はハブを絶滅させるのではなく、遺伝子操作による無毒化を目指す方式に賛成です。現に有害虫である外来種のウリミバエの場合はX線を利用し、不妊種をつくり、絶滅させています。長期に及ぶ労力と資金を使って、ウリミバエは根絶させられましたが、奄美の豊かさは、人間にとっても多くの動物等にとっても、共生や寄生が当たりまえになっている状態をこそ目指すべきではないかと考えます。お互いの縄張りを侵さないという棲み分け方式ではなく、一緒のところに棲んでいながら、お互いに何らかのギブアンドテイクの状態で共存することが大切なのではないでしょうか。

こうした暮し方、棲み方の具体例を、絶滅危惧種の琉球アユのケースで考えてみましょう。奄美でアジと呼ばれる琉球アユは、20年前まで一部の人びとの食膳にあがっていたのですが、当時、一般の人びとはあまり気に掛けていませんでした。この間、道路や農道の改善と、河川工事等の開発が急速に進む中で、琉球アユの絶滅が危惧される事態となりました。アユは水棲生物で、直接の保護が難しいわけですが、半面、アユの棲める20年前の自然環境を整えるだけで回復すると考えられます。さらに、アユは一年で産卵をしますので、数年もすれば棲息数が目覚ましく回復し、やがて食卓に上がる日さえ来ると思われます。付け加えれば、遺伝子操作等に較べて費用もかからず、理想的な共生状態が得られるものと考えます。

奄美の豊かな自然を大切にするのは大賛成ですが、あまりに固有種の保護、保護と叫びすぎると、江戸時代の生類哀れみの令に似た社会になりはしないでしょうか。仮にそうした規制が実施されたとしても、人間界の都合で生き物に序列を持ち込み、特定の種だけを保護することになる懸念があります。固有種の保護も専門家ナショナリズムの立場から過度に熱心に取り組むと、シマンチュウの生活と折り合いを付けながら育まれてきた自然の豊かさとは別の自然のあり様へと行きつくのではないかと、一抹の不安を覚える今日この頃であります。

■島嶼スケッチ

平成20年度奄美サテライト教室説明会

平成20年度奄美サテライト教室の説明会が、11月17日（土）、奄美大島（奄美市中央公民館金久地区分館３階）と徳之島（徳之島生涯学習センター）の２会場で同時に開催されました。奄美サテライト教室の現状と説明会の模様等について、奄美会場担当の山田奄美委員会委員長と徳之島会場担当の桑原奄美委員会委員の報告を掲載します。

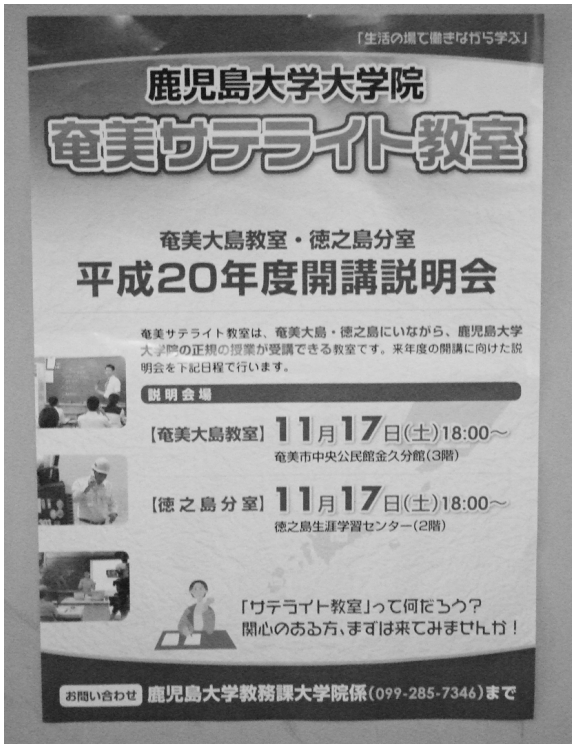
*

奄美サテライト教室情報
山田　誠（奄美委員会委員長）

☆平成19年度の事業特色

奄美に住みながら鹿児島大学大学院の正規授業が受講できる受けられる奄美サテライト教室がスタートして４年になります。今年度は、授業提供の研究科として教育学研究科も加わりました。人文社会科学研究科は、新たに徳之島町の生涯学習センターで徳之島分室の本格的な運用をはじめました。また、文部科学省の特別教育研究経費を投入する事業の最終年度であり、今後の需要堀り越こしの可能性を調査するという意図でもって20科目を超える授業を提供しました。それに加えて、奄美サテライト教室の活動記録と宣伝を兼ねたDVDを作製するなど多彩な事業を展開した年であったといえます。

今年度に特筆されるのは、徳之島分室におけるサテライト教室への関心の高さと強い受講意欲です。このことは、初年度から開かれている奄美市の教室は正規院生２名、科目等履修生７名であったのに対し、徳之島分室の科目等履修生が奄美大島と同じ数の７名集まったという状況にはっきりと現れています。こうした意欲に積極的に応えるべく、事前の授業計画には予定されていなかった授業方式（教師が徳之島分室に出向いてフェイス・ツー・フェイスで教える）を５科目開きました。それ以外の授業は、奄美教室から双方向の通信システムを使って送信しました。この方式は新しいだけに、時々トラブルに見舞われるなど運営の難しさも経験しました。



☆奄美サテライト教室説明会

平成19年11月17日に、平成20年度の奄美サテライト教室受講希望者の皆さんを対象にした説明会を、奄美大島会場と徳之島会

場で同時に催しました。奄美会場には10名程の方々が、徳之島会場には10数名の方々が参加されました。今年度は、木部研究科長が郡元キャンパスから両会場にあいさつを行ないました。説明会の主要な部分については、遠隔授業の装置を用いて奄美会場から徳之島会場に送信するという手法をとりました。また、この間の関係者の努力により、サテライト教室は次第に利用しやすい制度になってきています。具体的な事項をあげれば、両研究科にまたがって受講する場合も検定料・入学料は一度収めればよい。科目等履修生の受付期間も３日間から１週間に延長する、などです。

それぞれ会場では、研究計画書の作成要領や授業選択など活発な質問が相次いでだされました。その中で、申し込み時点で授業日を発表するという要望は、難しい点をいくつか含んではいます。しかしながら、受講希望者が授業料を払ったにもかかわらず、実際に受講できないという不合理さを生じさせないためには必要な措置だといえます。奄美委員会で検討しなければならないテーマといえます。

来年度から運営資金が極端に少なくなるため、人文社会科学研究科の場合、すでに決定している７科目[奄美プロジェクト研究（21世紀の過疎地域振興)、総合講義（自然保護と地域振興政策)、経営情報論特論、国際経済システム論特論、言語文化特論、文化人類学特論、宗教学特論]以外の授業提供はあまり見込めません。しかしながら、今後、提供授業の再編成などに必要となりますので、今年度も受けたい授業のアンケートを実施します。

奄美サテライト教室を全学的な取り組みにするという大学の方針に沿って、今回は全学の教務課大学院係が説明会の運営にあたりました。また、教育学研究科も正式に参加したため、説明会の正式名称からは人文社会科学研究科が外れ、鹿児島大学大学院となりました。今後の関連スケジュールは以下のようになっています。人文社会科学研究科の第二期入試に関しては、募集期間が平成20年１月11日（金）～１月17日（木)、試験日が平成20年２月14日（木)、15日（金）となっています。平成20年度前期の科目等履修生の募集期間は、平成20年２月27日（水）～３月４日（火）です。

―奄美サテライト教室についての問い合わせ先―
鹿児島大学教務課大学院係
〒890-0065　鹿児島市郡元１－21－30
電話：099－285－7346
問い合わせは、９時～17時まで
（土、日、祝日は除く）
奄美サテライト教室ホームページ：
http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/hss/

*

奄美サテライト教室　徳之島分室
平成20年度授業説明会

桑原　季雄（奄美委員会委員）

11月17日午後６時から７時50分まで、徳之島町生涯学習センター２階のパソコンルームにおいて、鹿児島大学および奄美サテライト教室（中央公民館金久分館）の二つの会場とインターネット回線でつないで、平成20年度授業説明会を開催した。鹿児島大学からは、井上晃男特任教授と学生部教務課大学院係の本忠夫係長、および桑原が参加した。徳之島では徳之島町教育委員会学校教育課の正田課長と19年度の科目等履修生7名および新しく６名の方が参加

してくださった。

説明会の会場となった生涯学習センター２階のパソコンルームでは徳之島OA販売の永蔵三也氏がインターネットによる動画送受信のセッティングを担当してくださった。部屋正面に大きなスクリーンをおろして、画面の右側半分では鹿児島大学からの映像を、左側半分では奄美市からの映像を映しだせるようにした。また、ビデオカメラを２台準備し、徳之島会場の映像を奄美と鹿児島に送信できるようにした。

午後６時に説明会が始まり、奄美会場から今年作成されたばかりのサテライト教室案内用のDVDが20分ほど放映された。映像には徳之島の受講生の一人、川上力氏が何度も登場して、時折笑い声が出るなどなごやかな雰囲気で見入っていた。そのあと、鹿児島大学からインターネット回線を通じてスクリーンで木部暢子人文社会科学研究科長の挨拶があり、参加者はみな、静かに耳を傾けていた。木部研究科長の挨拶に引き続き、木村大学院教務委員長による人文社会科学研究科と奄美サテライト教室についての説明、山田誠奄美委員会委員長の挨拶があった。

鹿児島大学からの映像も奄美市からの映像もいずれも画質は必ずしも鮮明ではなく、また動きも滑らかな映像ではなかったが、話の内容はスピーカーを通して明瞭に聞くことができた。また、徳之島からのマイクを通した声も奄美市の会場に届いたようではあるが、若干のタイムラグがあり、必ずしもスムースな応答ではなかった。

奄美会場で教育学研究科の担当者の挨拶や説明の間、受像を止めて、井上先生と本さん、桑原の３人で個別に来年度の授業に関して、徳之島の参加者に補足説明を行い、質疑応答の時間を持った。徳之島の参加者からは、どのようにすれば、徳之島会場でインターネット回線による授業ではなく、対面式の受講が可能なのかということについて多くの質問が集中し、来年度以降も持続して欲しいという声と合わせて、サテライト授業への関心の高さをうかがい知ることができた。

その後、また奄美会場からの呼びかけに応じて、インターネット回線による受像を開始し、大学院係の茂利さんから受講手続きの説明を聞いた。そののち、インターネット回線を完全に遮断して、徳之島会場だけの説明を継続した。また、開講アンケート用紙を配布し、その場でアンケートを書き終えた人については用紙を回収した。

今回の説明会への６名の新しい参加者の内訳は、男性３名、女性３名。年齢は30代２名、40代１名、60代３名。夫婦２組。現教員２名、元教員１名、主婦２名、元役場関係者1名。徳之島町から３名、伊仙町から１名、天城町から２名であった。今回も３町から参加者があったことになる。

徳之島では、今年度の受講生が周りの知人友人に声をかけたり、徳之島町教育委員会の正田課長が昨年度に引き続き大いに尽力してくださった。

山田委員長の冒頭の説明を受けて、せっかく立ち上がった徳之島でのサテライト教室を、受講者がいないということで消滅しないようにという危機感と意気込みが強く感じられた。質疑応答も活発で、結局７時半終了の予定が、終了したのは８時前であった。

■ちーびし

○執筆者紹介

①生年・出身地、②所属、③専門分野、④研究業績、⑤奄美と関係した活動の順番で掲載しております。

■大前　慶和（おおまえ　よしかず）

①1969年・大阪府
②鹿児島大学法文学部経済情報学科准教授
③環境経営論
④「ダンボールコンポスターを活用した環境教育教材の提案」第18回廃棄物学会研究発表会（つくば国際会議場）、2007
「飛躍をもたらす発想法の提案――共同研究の体験を基礎として――」『三田商学研究』Vol.50、No.3、2007
「環境教育教材『にじいろタウン』の建設」『地球のこども』No.115、2007
⑤龍郷町立赤徳小学校における環境教育の支援

■赤星　美穂（あかほし　みほ）
■矢野　真奈美（やの　まなみ）

②鹿児島大学法文学部経済情報学科3年

■山本　一哉（やまもと　かずや）

①1966年・鹿児島県
②鹿児島大学法文学部経済情報学科准教授
③国際経済論（アジア経済）
④「奄美の黒糖焼酎産業について（1）」『奄美ニューズレター』（17）、12～21頁、2005年4月、「奄美の黒糖焼酎産業について（2）原料糖問題」『奄美ニューズレター』（18）、39～47頁、2005年5月、「奄美の黒糖焼酎産業について（3）」『奄美ニューズレター』（20）、19～27頁、2005年7月。
⑤奄美員会委員（『奄美ニューズレター』編集担当）

■本田　碩孝（ほんだ　ひろたか）

①1943年・鹿児島県
②徳之島郷土研究会会長・鹿児島大学教育センター非常勤講師（「奄美の民俗文化」担当）
③民俗学、教育学
④奄美文庫７『奄美のむかし話』奄美文化財団、2007年
「奄美の民俗文化の事例～名瀬勝での御教示から～」、『民俗文化研究』、第8号、民俗文化研究所、2007年7月
「喜界島における島唄・島口の伝承」、『南島研究』、第48号、南島研究会、2007年11月
①『徳之島郷土研究会報』第29号編集・発行、研究会の開催

■朝沼　榎（あさぬま　えのき）

①1947年・鹿児島県奄美大島
②医療法人碧山会理事長
③外科学
⑤ヤジ友の会副会長、奄美市名瀬石橋町クリニック開業14年目